

四

祇園祭大船鉾10年のあゆみ

四条町大船鉾復興十年の佳節に寄せて

八坂神社 宮司 野村 明義

この度は平成26年(2014)に150年振りに巡行復帰を果たされてより10年の佳節をお迎えになりましたこと、洵におめでとうございます。

節目節目に歴史を振り返り、先人たちのご功績・ご苦勞に思いを馳せることは、未来への道しるべとなるものでありますので、この機会に大神様を中心に人々の国家安寧・疫病消除の祈りが幾重にも重なりあって発展してきた祇園祭の歴史を押さえておきたいと存じます。

『祇園本縁雑実記』によれば、祇園祭は貞観11年(869)に疫病が流行ったとき、勅を奉じて当時の国の数66国にちなんで66本の矛を立て神輿を送って厄災の除去を祈った「祇園御霊会」にはじまります。

当時の人々は疫病の流行を恨みを残して死んだ怨霊の祟りと考え、その御霊を祀り慰める御霊会を各地で度々行いました。その一つであった祇園御霊会が恒例化する契機となったのが、天延2年(974)円融天皇により大政所御旅所が定められて官祭となったこと。この御旅所の成立は今日まで続く祇園祭の核たる神輿渡御の形を作りました。本年はこの天延2年から数えて1050年目に当たります。

疫病流行に端を発した祇園御霊会は、その後都を代表する絢爛豪華な祭礼へと発展していきます。平

安時代には貴族らが調進した馬長や田楽が神輿に供奉したと伝わります。そして商人たちの台頭と共に商業座による奉納がみられるようになり、やがて座から町共同体へとその主体が移って、南北朝時代には現在の山鉾の原形が登場したと言われております。

山鉾巡行が神輿渡御に先立って行われることから、巷では山鉾は神輿の先祓いと言われることもありますが、本来神輿と山鉾は別々の理論の上に成り立っていると考えた方が自然に思われます。即ち、強いお力を持った祇園の神を年に一度洛中にお招きして氏子地域を見分いただくことで、疫神を蹴散らせることを期待する神輿渡御と、市中の疫神を依り代たる山鉾に集め、賑やかなお囃子によって機嫌よく氏子地域の外に送り出す山鉾巡行であり、前者が祇園社(現八坂神社)が主体であるのに対し、後者の主体は町衆です。

山鉾草創期の仔細は記録を欠きますが、大船鉾は『祇園会山鉾事』に「しんくくわうく舟(神功皇后船) 四条と綾少(小)路間」として応仁の乱前から出ていたことが確認できる山鉾のひとつであり、四条町が早くから栄えた町であったことがうかがえます。

そしてかつてはここにもう一つ、全く別の理論で

以て行われた祭がありました。それが祇園臨時祭です。これは天延3年(975)円融天皇の「痲瘡御惱」平癒の祈願を目的として初めて行われ、その後天治元年(1124)からは恒例化して還幸祭の翌日6月15日に、朝廷から祇園社に対して奉幣があった他、東遊・走馬・神楽等が奉納されました。室町時代の宝徳2年(1450)を最後に中絶したこの神事は慶応元年に復活を見ますが、その後明治6年(1873)に祇園祭の祭日が改暦に合わせて7月に移った後も6月15日を祭日としたために、祇園祭からは全く独立しました。当社の例祭日が6月15日に定められているのは、かつて官祭であったこの臨時祭の由緒を引き継いでいるためです。

祭は時代の変化に合わせて少しずつ、時には大きくその姿を変えることがございます。祭日の変更もそのひとつではありますが、他にも祇園祭がはじまって千百五十年の間には様々なことがありました。特に山鉾と関わり深い事項に絞っても、応仁の乱をはじめとした戦禍や、江戸時代に京都を襲った宝永・天明・元治の3つの大火をはじめとした火災、近代に入っては長く財政難に悩まされ、また人々の祭に対する意識変化から昭和40年(1965)を最後に49年間、後祭山鉾巡行が前祭に合同して巡行した時代もありました。

歴史を概観するだけでも、祇園祭が実に様々な困難を乗り越えてこれまで続けてきたことがうかがえます。平時には遠い過去の歴史として捉えがちなそれらのことが、しかし課題に突き当たったときには、

私たちの進む道を照らしてくれることがございます。先の新型コロナウイルス感染症の世界的流行では緊急事態宣言が度々出される状況下、大勢の人が集まることが難しく、神輿・山鉾を出せない事態に陥りました。そこで行ったのが大神様を神輿ではなく櫛にお遷ししての祇園祭史上初めての神籬巡行であります。これは応仁の乱後中々復興しない祇園祭に「神事退然るべからざる」として「御櫛を以て執行」するよう求めた室町幕府の命を参考に、人々が疫難に苦しむときにこそ祭を執行するべく知恵を絞った結果であります。

大船鉾にあつては元治の大火(1864)で多くの懸装品を失い、以降平成26年(2014)までの150年間、何度も復活を望む声が上がりがながらもそれが叶わず、しかしその間にも町では居祭を続けられて、大神様への信仰と町内の誇りを繋いで来られたと聞き及んでおります。居祭を以て託された思いが復興を呼び寄せ、さらに大船鉾の復興への歩みが示した道が、昨年のもとの巡行復帰にも生かされました。

今、祇園祭は様々な場面で地縁だけによらないご縁に支えられております。大船鉾の周辺にも復興から10年の間に、新たにその輪に加わってくださった方が大勢いらっしゃるものと存じます。この佳節に町の歴史や先人たちの思いを大いに語り共有して、町の歴史ごと祭を継承する仲間を増やす契機となりますことを期待すると共に、四条町大船鉾の益々のご発展とご関係の皆様のご健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



四條町大船鉾・祇園祭山鉾行事の歴史年表

四條町大船鉾の歴史			祇園祭山鉾行事の歴史			
平安時代	1441年	嘉吉元年	大船鉾建立	863年	貞観5年	疫病の流行により、神泉苑で初の御霊会
	1467年	応仁元年	応仁の乱により焼失	869年	貞観11年	全国の国の数を表す66本の矛と神輿3基による御霊会
	1500年	明応9年	応仁の乱が終わり23年目に再興	970年	天禄元年	祇園社で初めて御霊会を修し、定例となる
江戸時代	1788年	天明8年	天明の大火により焼失(御神面のみ残る)	1467年	応仁元年	応仁の乱により祇園会中止 以後33年間中断
	1804年	文化元年	再興 この後文化文政期の各調度品整い豪華になる	1500年	明応9年	33年ぶりに 祇園会復興し、山鉾36基が出るに際してくじを取る(くじ取り式のはじまり)
	1831年	天保2年	前年の大地震の影響により、不参加	1582年	天正10年	本能寺の変(6月2日)により、祇園会は11月に延期
	1839年	天保10年	囃鉦を新調(初代 南條勘三郎)	1591年	天正19年	豊臣秀吉が京中の地子銭を免除 この頃、祇園会に地之口米の制度が定められる
	1864年	元治元年	蛤御門の変により焼失(御神面・懸装品・金弊・楯が残る)	1708年	宝永5年	京中の大火(橋弁慶山など、多くの山鉾罹災)
明治・大正時代	1870年	明治3年	南北四條町合併 唐櫃巡行実施	1788年	天明8年	天明の大火により大半の山鉾焼失
	1871年	明治4年	番組小学校(後の成徳小学校)運営のために資金寄贈	1864年	元治元年	蛤御門の変により大半の山鉾焼失
	1877年	明治10年	この頃町家を売却	1865年	慶応元年	前祭は巡行なし。後祭は2基のみ巡行
				1872年	明治5年	これまで祇園祭を支えてきた神輿轆町・神人・駕輿丁・地之口米などの制度廃止 清々講社が府により認可され発足 同社による補助制度が新設される
				1873年	明治6年	太陽暦採用により、祭日が7月11日と18日に変更
				1884年	明治17年	前祭が大雨により巡行を途中で打ち切り、23日に延期(天候のため延期された唯一の事例)
				1888年	明治21年	この年以降、祭日が7月17日と7月24日となる
				1899年	明治32年	維新後、京都府庁で行われていたくじ取りが、この年以降京都市役所で行われる
				1912年	明治45年	四條通・烏丸通の市電開通により府は山鉾巡行中止を勧告。議論の結果本年に限り巡行許可
				1916年	大正5年	この年、木内重四郎知事より永久に山鉾巡行を許可するに至る
昭和時代				1923年	大正12年	山鉾連合会が組織され、京都市に山鉾修繕補助金の制度ができる
				1943年	昭和18年	太平洋戦争のために以後4年間山鉾の巡行が中止される
				1947年	昭和22年	京都市観光局長がGHQに祇園祭復活を掛けあいを承され、宵山の一部が復活し、長刀鉾がお旅所まで往復巡行する 神幸祭(17日)、還幸祭(24日)復活
				1949年	昭和24年	戦後初めてのくじ取りが実施
				1950年	昭和25年	後祭(24日)の巡行復活 前祭・後祭合わせて巡行する山鉾が16基になる
				1952年	昭和27年	戦前どおりに全山鉾が巡行 また、お迎え提灯も80数年ぶりに復活 菊水鉾が仮鉾にて巡行に参加 祇園祭が文化財保護法による「助成の措置を講ずべき無形文化財」として選定される
				1953年	昭和28年	くじ取り式が戦後初めて京都市会議場で行われる 菊水鉾が真木・屋根・車など総白木で88年ぶりに復興

四條町大船鉾の歴史			祇園祭山鉾行事の歴史			
昭和時代	1970年	昭和45年	京都府立総合資料館に御神面を除く懸装品等一式を寄託	1956年	昭和31年	前祭のコースが四條寺町を北上し御池通を西進するコースに変更される 御池南側に有料観覧席を設置(3,900席)
	1984年	昭和59年	国際伝統工芸博に岩戸山の下回りを借りて復元展示 五代目南條勘三郎氏より囃鉦12個寄贈を受ける	1961年	昭和36年	前祭の巡行コースが河原町通を北上、御池通西進コースに変更
	1991年	平成3年	懸装品のお飾りを可能な限り縮小	1962年	昭和37年	祇園祭の山鉾29基が、重要民俗資料(後に重要有形民俗文化財と改名)に指定される 阪急電鉄の地下工事のため、巡行中止
	1995年	平成7年	居祭りの中止 神事のみのお飾りとする	1963年	昭和38年	曳き手不足のためか、巡行が遅れる 保昌山が曳き手不足を補うため、昇山として初めて車輪を取り付けて巡行
	1997年	平成9年	囃子復活 隔年で京都文化財展示室に懸装品展示	1966年	昭和41年	24日の後祭が17日の前祭に合同される 後祭に代わって、24日に花傘巡行列が開始
	2002年	平成14年	京都文化財展示室閉鎖	1968年	昭和43年	祇園祭の山鉾のうち10基を収蔵する「祇園祭山鉾館」が円山公園に建設される
	2006年	平成18年	宵山の飾り席復活(懸装品のみ)	1977年	昭和52年	地下鉄工事のため、烏丸通が通行不可能となったのを機に、全山鉾、新町通を巡行して帰町となる また、有料観覧席も烏丸-新町間に拡大 これ以降、巡行解散地点は御池新町となる
	2007年	平成19年	装飾品121点が京都市指定有形民俗文化財指定 居祭りの復活	1979年	昭和54年	祇園祭の山鉾行事が重要無形民俗文化財に指定される
	2009年	平成21年	京都市文化博物館「受け継がれる祇園祭」に懸装品展示 メトロポリタン美術館名誉館員 梶谷宣子氏による懸装品鑑定	1984年	昭和59年	祇園祭の常設展示室「三井銀行文化財展示室」オープン(2002年5月31日閉室)
	2010年	平成22年	四條町大船鉾保存会を一般財団法人として登記 宵山の飾りで御神体を出すことを決定 祇園祭山鉾連合会にオブザーバー参加 公益法人認可	1988年	昭和63年	四條傘鉾が再興され、巡行に参加
平成時代	2011年	平成23年	祇園祭山鉾連合会に正式参加 京都市無形文化遺産展示室オープンに際し、147年ぶりに櫓木部を新調披露			
	2012年	平成24年	唐櫃での巡行復帰			
	2014年	平成26年	150年ぶりに鉾本体での巡行復帰	2009年	平成21年	京都祇園祭の山鉾行事がユネスコ無形文化遺産に登録される
	2015年	平成27年	六本木ヒルズにて出張展示	2014年	平成26年	後祭巡行復活
	2016年	平成28年	龍頭 新調 保存会会所取得			
	2018年	平成30年	ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞最優秀賞受賞			
	2020年	令和2年	コロナ禍により櫓巡行 鉾建てはせず	2020年	令和2年	新型コロナウイルス感染防止のため、山鉾建て・山鉾巡行が中止される
令和時代	2021年	令和3年	前年に引き続き櫓巡行 鉾建ては実施	2021年	令和3年	新型コロナウイルス感染防止のため、山鉾巡行が中止される。17保存会のみ、山鉾建て実施
	2022年	令和4年	上村淳史画伯作格天井天井画お披露目	2022年	令和4年	鷹山復興 鉾による巡行復帰
	2023年	令和5年	ベトナム国営放送より軒幕寄贈			



幸野樺嶺筆「大船鉾図」(龍頭)



幸野樺嶺筆「大船鉾図」(龍頭)

幕末までの大船鉾

大船鉾の歴史は古く、文献上の初出は応永29年(1422)まで遡ります。

『康富記』応永29年6月14日の条には、「祇園祭礼也、神幸如例、梓山船以下風流盡美如例年」とあり、少なくともこの年以前より大船鉾が巡行参加していたことが確認されます。その後、応仁元年(1467)に勃発した応仁・文明の乱によって、祇園会は停止に追い込まれ、33年後の明応9年(1500)に再興されます。

明応9年祇園会再興の史料である『祇園会山鉾事』には、応仁の乱前の山鉾を列挙したとされる箇所、現四条町と同じところから鉾が出されていたことがわかる記述があります。

近衛政家の日記である『後法興院記』によれば、乱後の明応9年(1500)に再興されたのは、前祭の山鉾が26基、後祭の山が10基であるとあります。『祇園社記』にも大船鉾が出たとの記録はなく、明応9年段階では未だ復興できていなかったようです。この年

に出されたのは、現在の名称でいえば、橋弁慶山、八幡山、鈴鹿山、観音山、浄妙山、黒主山、鯉山、役行者山、鷹山、そして現存しない「かつら山」の10基になります。規模が大きい分、鉾の復興は遅れ気味であったのでしょうか。しかしながら、大永5年(1525)の制作と推定される「洛中洛外図」(歴博甲本)などには数多くの鉾が描かれており、明応9年からそう遠くない時期には再興を果たしたものと思われます。

天明8年(1788)の天明の大火では、京都の都心部のほとんどが罹災し、大半の山鉾が焼失します。大船鉾も同様に、御神面を除く本体や装飾品のほぼ全てを失ってしまいました。10年後の寛政10年(1798)には、何体かは定かではないが御神体人形が再興されたことが知られ(『祇園会山鉾評』)、おそらくは遅く



大船鉾「祇園祭礼図屏風」(個人蔵)部分



ともこの時以来、会所飾りのみ復興されたと思われま
す。大船鉦が巡行参加するのは、罹災後15年余りを
経た文化元年(1804)であることが、六角町文書
の中に存する『祇園山鉦書 人』に記されています。復
興した鉦には、文化4年(1807)には後掛幕が、同
10年(1813)には大金幣が新調されるなど、行装が徐々
に整えられていきました。

これ以後、元治元年(1864)の蛤御門の変で再び
罹災するまでが、大船鉦が最も華麗な姿を見せた時期
であり、現存する装飾品等の遺品類は、この時に整え
られたものがほとんどです。

居祭り と 過去の復興機会

四条町では、元治元年の蛤御門の変において、船鉦
本体木組みを焼失以降、「休み鉦」となって山鉦巡行
には参加はしないものの、神事のみを執り行い、装飾
品を四条町にてお飾りする「居祭り」を140年以上に
わたって続けてまいりました。

幕末の罹災後も、四条町では幾度も大船鉦を復興す
る動きがありましたが、いずれも実現に至りません
でした。とくに明治3年(1870)には唐櫃巡行を行って
鉦再興の意思表示を示したにもかかわらず、鉦再興の
ための莫大な資金を、翌明治4年(1871)に、その2
年前に四条町に開校した下京第九番組小学校(後の成
徳小学校)の運営のために年寄り崑助の名で寄贈した



居祭り (1960)



居祭り (1961)



当時の四条町の様子 (1960)



居祭り (1962)



居祭り (1972)



南極物語の撮影 (1988)

という記録が残っています。さらにまた学校
運営においても、竈金(かまどきん)や軒役(の
きやく)という形で四条町町衆が資金負担い
たしました。小学校自体は、明治9年(1876)
に校舎が手狭になったため白楽天町に移転し
ますが、翌明治10年(1877)に四条町では
町家を売却しており、これは学校運営で生じ
た莫大な借金を返済するためであったものと
言えます。

結果的には、町家を手放したことが後々ま
で大船鉦の復興を困難なものにしたわけですが、
明治維新という近代の黎明期に青少年の
育成に力を注いだ先達の心意気は、いまま
私たちが四条町町衆の誇りとするところであり
ます。

その後、時を経た昭和57年(1982)、当
時の祇園祭山鉦連合会理事長であった田中常
雄氏より、連合会がスポンサーとなつての大
船鉦再建のお話をちょうだいいたしました
が、四条町ではかかるお申し出に対して、町
内の総意としてお断りしております。この
当時においては、「神事は大切に行わなけれ
ばならないが、鉦復興など減相もない、大変
だ」という意見が大半でした。



国際伝統工芸博覧会（1984）での大船鉦レプリカ

国際伝統工芸博覧会での レプリカ展示

祇園祭には神輿をお迎える「前（さき）の祭」とお送りする「後（あと）の祭」があり、それぞれに山鉦が巡行します。新町通りの綾小路をはさんで南の船鉦は前の祭に、北の船鉦は後の祭に巡行していました。二つの船鉦は同時に巡行することがなかったので、江戸時代以降はともに「船鉦」と呼ばれていました。区別する場合は祭の日程から「十四日船鉦」と呼ばれていました（当時は旧暦の6月14日に後の祭が行なわれていました）。

居祭りを行うようになってから、町内では「凱旋船鉦」と称するようになりました。これは、前の祭の船鉦が神功皇后の出陣を表すのに対し、後の祭の船鉦は戦に勝った凱旋の船を表すものであることによるものです。

昭和59年（1984）の伝統工芸博覧会において凱旋船鉦の復元展示（レプリカ）が行なわれました。

ちょうどそのときに韓国の全斗煥大統領が、第二次大戦以後韓国の大統領としては初めて訪日されることになり、さらに上洛されるということで、国際情勢に鑑み四条町が名称を変更することにしました。その際、「祇園社記」に記述されている「大船」の呼称をもとに、「大船鉦」と称することとしました。町内には前の祭の船鉦より大きかったという伝承もありますが、同時に巡行したことがありませんので、真偽の程は不明です。



国際伝統工芸博覧会（1984）での装飾品展示

居祭りの中止と囃子の復活

平成7年（1995）、四条町内在住人口の減少や高齢化による祭事執行の後継者不足を理由に、幕末より続けてきた形式での「居祭り」を中止し、この年以降は「飾り席」を設けずに、神事のみのお飾りを以て祭りを行うという大幅に縮小された形での祭事に変更されることになりました。

この祭事縮小は、大船鉦の神事存続にとってはまさに最大の危機でありましたが、逆にこの飾り席中止があったからこそ、今回の復興への動きが始まったと言えます。

翌平成8年（1996）、前年の飾り席中止によって四条町から祭礼期間の賑わいが無くなったことを憂いた四条町内の若手が、新しい形での「居祭り」の形として幕末から途絶えていた囃子の復活を提案し、ついには町内の大半であった反対意見を押し切って、町内若手有志を中心とした四条町大船鉦囃子方が結成された

のです。

楽譜はもちろん使える楽器も残っていなかったものの、このときよりおよそ10年遡った昭和59年（1984）秋に開催された伝統工芸博覧会に大船鉦懸装品が展示された後、大船鉦の復興を願って伏見の工匠（鳴物仏具鋳造加工師）である南條一雄（五代目南條勘三郎）様よりご寄贈いただいた12丁の鉦が存在したために、楽器の調達は大鼓だけで済ませることができ（笛は囃子方各個人が購入）、囃子復活の大きな原動力となりました。また同じ時期に四条町内東側に校地を拡張された池坊学園様に楽器の保管場所と練習場所の貸与を受けることができました。そして同じ新町通にある岩戸山保存会囃子方様より囃子演奏のご指導をいただくことができ、平成9年（1997）の宵山では130年振りに大船鉦囃子の復活を実現することができました。

またゆかりのある、幸野椋嶺画伯の孫である幸野豊一氏に依頼し、完成した大船鉦巡行の絵を飾り、居祭



囃子方の復活（1997）

りに華を添えました。

さらに2年目からは囃子方を公募したことで、四条町外から多くの人材が集まり、当初こそ囃子の技量向上と演奏活動のみに集中したものの、その後囃子方有志より発展的に大船鉦祭事全般にかかわりたいとの希望も出るようになり、結果的に四条町祭事執行の後継



囃子方復活を記念して作製した大船鉦の絵（1997）

者不足が一気に解消されることとなりました。

平成19年（2007）3月に大船鉦装飾品121点が京都市指定有形民俗文化財に指定されたことを契機として、同年、いったん中止となっていた「飾り席」が13年振りに復活、大船鉦の装飾品を四条町内の商家にて再びお飾りするに至りました。



八坂神社での奉納囃子（2005）



飾り席の復活（2007）

再建への動き

飾り席は復活したものの、従来そのままの居祭りを続けても同じ歴史の繰り返しでは祭事消滅の危機は消えないという意見もあり、平成20年（2008）には四条町在住者有志と大船鉦囃子方有志によって「大船鉦祭事振興協議会」が発足され、さまざまな議論を経て、「大船鉦の復興を成し遂げるからこそが唯一、大船鉦祭事継続の力となることである」という結論に至りました。

大船鉦の復興を前提とした組織体制作りとして、まずこれまで任意団体であった保存会を母体として、平成22年（2010）4月に一般財団法人四条町大船鉦保存会が設立され、同年10月には京都府より公益認定を受けて、公益財団法人四条町大船鉦保存会が正式にスタートいたしました。現在、大船鉦の復興事業ならびに祭事運営はすべてこの公益財団法人を主体として実施いたしております。

平成21年（2009）、「祇園祭の山鉦行事」がユネスコの無形文化遺産に登録され、その中に大船鉦の「居祭り」も含まれたことで、四条町内では鉦復興に向けての機運が一気に盛り上がりました。そして同じ時期に、祇園祭山鉦行事の無形文化遺産登録を記念して新設されることとなった京都市無形文化遺産展示室のメイン展示品として、「大船鉦」を展示することが決まり、その後開催された京都市主宰の展示検討委員会では、展示すべき鉦は「レプリカ」ではなく「本物の大船鉦」であるべきであるとの結論が出されました。

櫓部分を含む大船鉦全体の設計については、大船鉦復原検討委員会（祇園祭山鉦連合会主宰、国庫補助会議）において、船鉦保存会様よりの多大なご協力をいただきながら基本設計の協議も完了いたしました。

資金源としては、おりしも創立60周年を迎えられた京都青年会議所様より創立60周年記念事業として大船鉦の復興事業を支援したいというお申し出をいただき、こうして平成23年（2011）、まずは櫓本体（船形木組み部分）の復原を果たしました。

また、平成23年度京都府の補助金枠を頂戴し、人形作家 林駒夫氏に監修いただき、渡文株式会社製作のもと、神功皇后の狩衣と安曇磯良神の厚板装束を新調いたしました。



京都市無形文化遺産展示室の開設記念式典



京都市無形文化遺産展示室内での鉦組み立て



京都市無形文化遺産展示室での船形木組部分の復原展示 (2011)



磯良 (紅地金立湧に雲板波の丸文様厚板)



神功皇后 (白地檜垣に四ツ割菊に葉附菊文様単狩衣)

唐櫃巡行での巡行復帰

平成24年(2012)、祇園祭山鉾巡行に「唐櫃巡行」という形で巡行行列に参加することとなりました。

元治元年(1864)の禁門の変により木部部分などを多く焼失、明治3年(1870)に鉾再建に近い「唐櫃巡行」を行って以来、142年ぶりの巡行参加となります。

これは、大船鉾木部檣部分の披露を終え、「私共には後戻りという言葉はない。目指すは平成26年(2014)の大船鉾巡行。今年から唐櫃巡行を行い、内外に私共の必ず成し遂げるという覚悟を示すとともに巡行を経験する時期に来ている。また、完全復興には更なる皆様の支援が必要であり、皆様方に私共の現状を広く認知して頂こう。」という思いからの決起でありました。

2月初めの保存会の臨時総会で決定し、正式に祇園祭山鉾連合会に申し入れたところ、参加を認める旨の連絡をいただきました。

平成24年(2012)、142年ぶりに「唐櫃巡行」の形による山鉾巡行への復帰を果たしました。併せて吉符入り式も執り行い、宵山では日和神楽へ参列を果たしました。

唐櫃とは

脚の付いた櫃のこと。櫃とはかぶせ蓋がついた箱のこと。古くから現在に至るまで収納用に多用されている。

唐櫃巡行とは

諸処の事情により山鉾本体が出せない時に「御霊(みたま)」を唐櫃に納め巡行加列すること。



吉符入り式 (2012)



唐櫃巡行 (2012)

◎これまでの唐櫃巡行

禁門の変以降の、これまでの唐櫃巡行を列記させていただきます。当方で解っている分だけですのでご容赦下さい。

元治元年(1864)	「禁門の変」の罹災
慶応元年(1865)	「鈴鹿山」唐櫃巡行
慶応二年(1866)	前祭は霞天神山、郭巨山、琴破山(ことわりやま・のちの伯牙山)の他は唐櫃で巡行。但し、保昌山は榊で巡行。放下鉾はこの後も6年連続で、唐櫃巡行を行った。
明治二年(1869)	「南観音山」唐櫃巡行
明治三年(1870)	「当町」唐櫃巡行
明治四年(1871)	「南観音山」唐櫃巡行
平成二十四年(2012) ～平成二十五年(2013)	「当町」唐櫃巡行
令和元年(2019)	「鷹山」唐櫃巡行

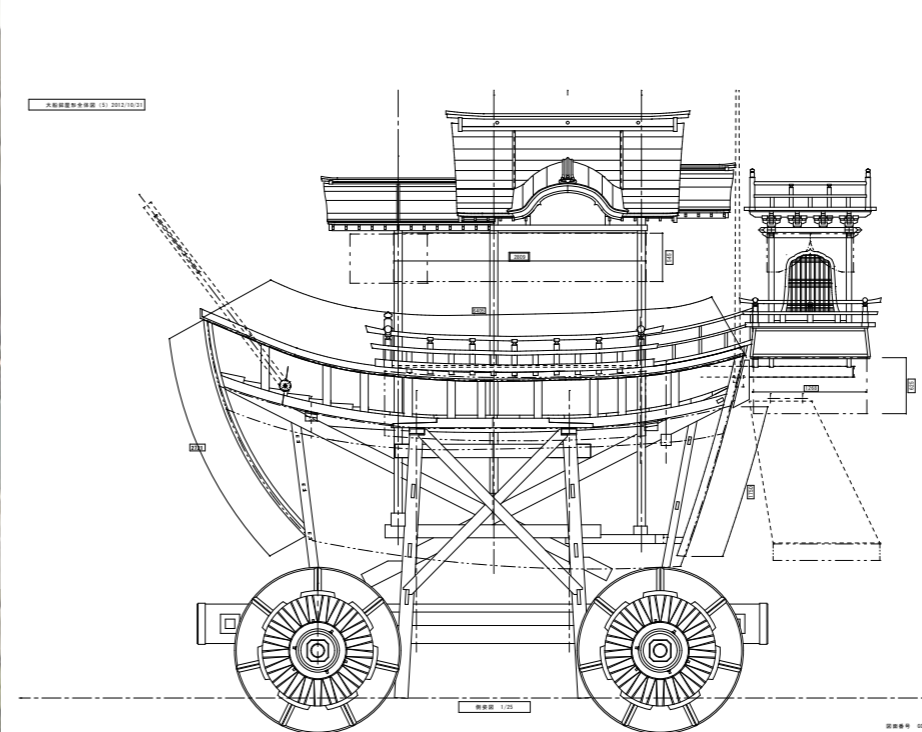


2012 唐櫃巡行

2013 唐櫃巡行



日和神楽 (2012)



設計図

祇園祭大船鉾10年のあゆみ

平成24年(2012)7月、祇園祭山鉾連合会にて「後祭代表者会議」が行なわれ、平成26年(2014)7月24日に後祭り巡行復活が目指される事が決まりました。

平成24年10月に「第7回大船鉾復元検討委員会」が開催され、鉾全体の設計図が完成いたしました。

また平成24年11月には、菊水鉾保存会様より足回り部分(石持、車輪、車軸)のご寄贈を受けました。

平成25年(2013)3月には、平成26年に創立60周年を迎えられる京都ライオンズクラブ様より、屋形部分(屋形、艦屋形、跳ね出し高欄)ご寄贈いただくことが決定し、八坂神社常盤新殿にて共同記者発表をいたしました。

6月9日、京都ヨドバシビル1Fの京都市無形文化遺産展示室にて、黒主山保存会様からご寄贈いただいた、欄縁の贈呈式が行われました。

漆塗りの黒鯨色(くろろいろ)仕上げの欄縁は、甲板の左右各7メートルと船首部分1メートルあり、黒光りしてひとときわ輝いていました。

また、祇園祭神輿、中御座にご奉仕されておられます、三若神輿会、祇神会様より助成いただき、巡行時に音頭取が命綱として持つ房、力綱を作製いたしました。力綱は2本あり、長さは各約1.9メートルになります。

大船鉾囃子方において、鉦方が手首からぶら下げ、鉦の音とともに上下して風情を演出する飾り房が新調されました。

四条町から「鉾本体の懸装はどっしりした色が多いので、淡く軽やかな色合いをめざしていただきたい」と依頼しましたところ、非常に涼やかな色合いの8色の房を作っていただきました。8本全て色が違うというのも、なかなか珍しいと思います。



屋形部分完成 (2014)

2014 鉦本体での巡行復帰



屋形御披露目会パンフレット

平成 26 年 (2014)

大船鉦の復興と後祭りの復活

平成 26 年 (2014) 1 月、屋形部分一式が完成し、京都市無形文化遺産展示室にて、屋形御披露目会を行いました。

2 月には、京都市芸術大学の学生の方々デザインによる、裾幕が完成いたしました。

5 月には、京都府久御山の宏和運輸倉庫(株)様にて、試し曳きを行いました。

5 月 3、4 日と 2 日間をかけて、鉦の木材を組み、荒縄を巻き付ける縄がらみを行い、5 日には、屋根、舳屋形の設置、6 日には本番さながらの試し曳き、辻

房をつるして検分させていただきましたところ、それだけで静寂のなか、鉦の音が遠くでなっている錯覚に陥るほど見事な出来栄でした。

そして、2 年目の唐櫃巡行を挙行了いたしました。



試し曳き (2014)



回しの練習をいたしました。そして翌7日には、解体作業。と鉾建てから解体までの一連の作業を一つずつ点検いたしました。

実際に鉾を建て、曳いてみないとわからない課題を知ることが出来、大変有意義な試し曳きでありました。それと同時に、本番の巡行への自信も深めることが出来ました。

この試し曳きに対し、無償で場所の提供・ご協力をいただいた、宏和運輸倉庫様(株)様に改めて感謝申し上げます。

7月20日、初の鉾建て宵山初日に、八坂神社森宮司、山田京都府知事、門川京都市長ご臨席のもと、復興御披露目会を開催いたしました。

そしてついに平成26年7月24日、多くの方々の



大船鉾復興御披露目会パンフレット

ご支援をいただき、49年ぶりに復活した祇園祭後祭巡行におきまして、元治元年(1864)蛤御門の変で焼失して以来、150年ぶりの鉾本体での巡行復帰を果たしました。

平成27年(2015)

六本木ヒルズでの鉾展示

平成27年(2015)6月19日(金)～21日(日)3日間、東京・六本木ヒルズにて、「ほんまもん」だけ3DAYSと題し、「京の夏の旅」キャンペーン40回記念特別イベントが開催され、祇園祭大船鉾も出展、協



力いたしました。

京都市外に大きな鉾が建てられるのは、昭和45年(1970)大阪万博の菊水鉾以来、45年ぶり、東京での展示は昭和30年(1955)の月鉾以来、60年ぶりということでした。

17日(水)から、京都駅ヨドバシカメラ内の屋形部分の解体、積み込み、円山公園収蔵庫の車輪、石もち等の積み込みを行い、深夜に京都を出発し、18日(木)の午後より、六本木ヒルズアリーナへ搬入、鉾建てを

開始いたしました。

19日(金)は、鉾建ての様子を一般の方々にも見学していただき、夕方には、オープニングイベントが開催されました。20日(土)の朝に車輪をはめ込み、鉾が完成し、2日間船上で囃子を演奏いたしました。

期間中、多くの来場者で賑わい、京友禅きものショーや京都の物産ブース、五花街の芸妓・舞妓40名が舞を披露するなど、「ほんまもん」の京都を存分に体感されていました。



六本木ヒルズにて「出張展示」(2015)



2015

また新たに、前掛（紅地雲龍青海文綴織）、天水引房飾（大四丁・小四丁）、安曇磯良神うこん地精好大口袴、格天井、以上4点の新調事業を行い、無事完成の運びとなりました。

京都府、京都市、公益財団法人祇園祭山鉾連合会、祇園祭大船鉾復原検討委員会、京都紫明ライオンズク

ラブ様、西陣織工業組合、京都房燃糸工業共同組合をはじめ関係各位のご支援とご指導を賜りました。

またこの間、ご懇篤な監修を賜りました藤井健三氏、末川協氏、林駒夫氏ならびに精緻な製作技術により新調を成しえていただきました株式会社龍村美術織物様、前河建具店様、堀金箔粉株式会社様、株式会社鍵辨組房店様、株式会社のむら様に改めて厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 (2016)

龍頭の新調

四条町がかつて北四条町と南四条町に分かれて隔年で祭礼を担当していた時代、南四条町の年は大金幣、北四条町の年は龍頭を舳先に飾って巡行しており、本来の姿に復するためにも龍頭の復興が望まれておりました。

龍頭は呉春の下絵をもとに、江戸後期に京都で製作されたことが明らかであり、大船鉾復原検討委員の水野耕嗣先生より当時京都で活躍した九山新之丞作の可能性が指摘されておりました。九山新之丞の龍が京都の瀧尾神社にあるとの助言により見学させていただいたところ、瀧尾神社の佐々貴信美宮司がたいそう喜ばれ、寄進を申し出ていただきました。

平成 26 年 (2014) に水野先生・小嵯善道先生に専門委員をお願いして龍頭製作検討委員会を設置、情報提供の呼びかけ、龍頭制作者の公募を行い、彫師として米原市の森哲荘氏が選ばれました。製作途中に瀧尾神社の龍が修理のため下ろされることになり、構造を調べた結果、取付方法から大船鉾龍頭の試作品の可能性が指摘されました。断定はできないものの同時代・同規模の龍の彫刻として大いに参考にすべきとの小嵯先生のご意見に基づき、手本としながら彫刻が進められました。

本来は漆塗・金箔を施すべきですが、木材の乾燥期間が必要なため、当面は素木でのお披露目・巡行とすることになりました。



前掛

天水引房飾

安曇磯良神うこん地精好大口袴



格天井

2016



龍頭

奇しくも龍頭復興が実現した本年、元治の兵火における山鉾町の被災状況を調べた橋弁慶町の古文書から、龍頭が鉾本体とともに焼失した記録が発見されました。これで当時の龍頭が存在しないことが事実になりました。復興した龍頭は名実ともに大船鉾唯一の龍頭として今後の巡行を飾ることになります。

なお、彫刻師の森哲荘氏は今回の龍頭制作の縁で途絶えていた九山家の名跡を継がれることになり、龍頭奉納に花を添える次第となりました。

平成27年(2015)に前懸幕「紅地雲龍青波文綴錦」が、そして平成28年(2016)には前部下水引一番(緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺



前部下水引一番

繍)が完成し、これで船首を飾る一連の幕類が新調作で揃いました。本幕そのものは小さい幕ですが、鉾の長い船縁両側に懸かる「波に飛龍(飛魚)文様の刺繍」水引幕を正面中央で纏めて鉾を象徴する重要な幕であり、毅然と輝いて覇気ある龍の姿に特色がみられます。製作は龍の意匠のみならず刺繍技法や金糸の織度と材質を吟味して慎重に進められ、刺繍師も渾身の力量を発揮して一針一針に意を込めて繙き上げていただきました。

古色に映える銚り金具、そして前年と前々年に作られた二番水引幕と前掛幕に並んで優るとも劣らない出来栄えとなりました。

平成28年(2016)6月18日(土)池坊短期大学洗心館1階悠々の間において、本年新調いたしました、龍頭と前部下水引一番のお披露目を開催いたしました。

京都ライオンズクラブ様の奉賛により車軸を新調致しました。



龍頭・前部下水引一番御披露目会パンフレット





平成 29 年 (2017)

会所の取得

四条町大船鉦会所改修事業が、無事竣工の運びとなりました。

平成 27 年 (2015) に、四条町ご在住の方から、「大船鉦の会所として使っていただけるなら」というご厚意により、四条町 355 番地の京町家を会所として取得することができました。



四条町大船鉦会所改修竣工記念式典



その後平成 28 年 (2016) に、関係各位によるご尽力の結果、会所の改修・修復に関して、米国のワールド・モニュメント財団より支援事業、「京町家再生プロジェクト」として助成を受けることが決定、それに加えて京都市より京都市景観重要建造物の指定を受け、「京都市市街地景観整備補助金」、「京都市空き家活用・流通支援等補助金」の助成も併せて受けることとなりました。

平成 28 年 (2016) のお祭では、二階に橋をかけ、鉦に上り下りするための工事を行い、お祭り終了後の 8 月より本格的な改修工事にとりかかりました。

設計・工事に際しては、京都の職住一体型生活文化の象徴である京町家の佇まいを保ちつつ、宵山、鉦巡行と、祇園祭に携る会所としての機能を持たすことに大変苦慮いたしましたが、特定非営利活動法人京町家再生研究会、公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター、ならびに施工いただいた一般社団法人京町家作事組の皆さまにご助言・ご指導いただき、また株式会社 LIXIL 京滋支店様を始め、多くの方々のご支援をいただき、平成 29 年 (2017) 3 月無事竣工の運びとなりました。

平成 29 年 (2017) 4 月 15 日 (土) には、改修竣工記念式典を門川大作京都市長ご臨席のもと執り行い、関係者内覧会も開催いたしました。

大船鉦には主祭神である神功皇后がお乗りになっておられますが、前祭の船鉦と同様、安曇磯良神と住吉明神、鹿島明神の御三神がお供されるのが本来の姿です。皇后様の御神面は幕末の戦火を遁れましたが、皇后様の御本体と御三神は焼失いたしました。明治初めに皇后様の御本体は復興されましたが御三神は復興されずに至っておりました。



跳ね高欄

御三神の内の一神である安曇磯良神のご神霊を勧請することとなりました。

京都未来の匠「技の継承」事業として京都府の助成をいただき、京都漆器工芸協同組合のご協力で、跳ね高欄の朱塗りが完成いたしました。

大船鉦は復興以来白木のままで、欄縁以外、塗は施されていませんでしたが、復興 5 年目にして取り掛かることが出来ました。

今後、艫屋形、龍頭の漆箔と順に取り掛かっていくこととなりました。

また、「山鹿精華」作、「旭光萬壽山図綴織」を取得し、後掛を新調いたしました。



2017



2018

平成 30 年 (2018)

ユネスコのバンコク事務所において、「四条町大船鉾会所改修プロジェクト」が、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が実施する、アジア太平洋文化遺産保全賞の最優秀賞を受賞いたしました。

アジア太平洋文化遺産保全賞は、民間部門及び官民共同の取組によるアジア太平洋地域において遺産としての価値を持つ建造物、場所及び資産の保全又は修復の優れた成果について表彰するものであり、8つの国から41件の応募があった中から最優秀賞を受賞しました。

この受賞は大変名誉なことであると同時に、四条町大船鉾会所を歴史的建造物として、有機的に未来永劫受け継いでいかねばならない責任が一層強くなった受賞でありました。

この年のお祭りで、住吉明神を勧請いたしました。

令和元年 (2019)

鹿島明神を勧請いたしました。

また、神功皇后御神面は、禁門の変の戦火も逃れ、四条町町衆が代々引き継ぎ、御神体として大切にお祀りしてきましたが、老朽化も著しく、写し面を能面打見市泰男氏に制作いただきました。

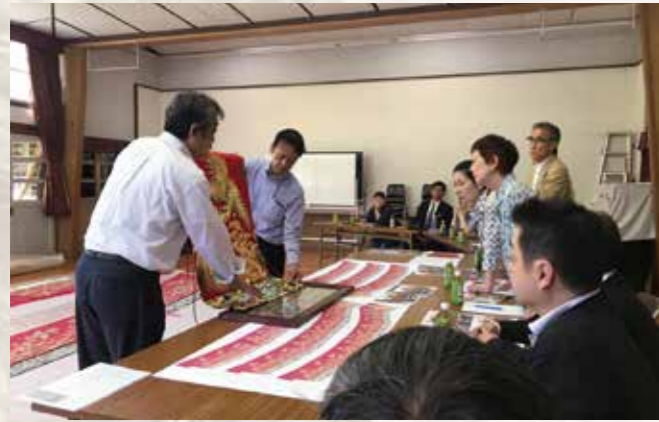
令和元年（2019）年9月クアアチアドゥブプロブニク市にて、受賞式典「THE BEST IN HERITAGE」が開催され、プロジェクト内容がWMFのダーリン・マクロード氏によって発表されました。

当日は四条町大船鉾保存会からも、林邦彦理事長は



じめ、5名で参加いたしました。

四条町先達の御尽力により、幕末の罹災を逃れた大船鉾の衣裳であります。その都度修理等は行っているものの永年の使用による疲労がみられ、また当時に技術を知る文化財としての重要性を踏まえ、京都府京都市の助成を受け、一二番水引6枚及び鱸水引3枚を9年間かけて新調することとなりました。



水引 (右舷前部・左舷前部)



鱧屋形欄縁下水引幕 (右・後・左)



2019





龍頭の漆箔が完成



下水引一番緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺繍、
下水引二番金地彩雲草花文綴織（左舷前部）が完成

神事、居祭りを滞りなく行いました。

平成 28 年（2016）の復原新調より白木のままでありましたが、京都ライオンズクラブ様、お祭り期間中の皆様方からのご厚志により、京都府仏具協同組合様の施工で漆箔が完成いたしました。

京都府京都市の助成を受け、一二番水引 6 枚及び鱧水引 3 枚を 9 年間かけて復元新調する事業のうち、下水引一番緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺繍、下水引二番金地彩雲草花文綴織（左舷前部）が完成いたしました。

令和 2 年（2020）

この年の祇園祭は新型コロナウイルスの蔓延により、神輿渡御、山鉦巡行は中止され、榊巡行となりました。

しかしながら、四条町大船鉦といたしましては、



令和 3 年（2021）

昨年に引き続き新型コロナウイルスの蔓延拡大を懸念して、山鉦巡行はなく、榊巡行となりましたが、鉦建て、宵山行事については各山鉦町の判断に委ねられました。四条町大船鉦といたしましては、感染対策を十分取った上で、神事は勿論のこと、鉦建て、宵山行事についても例年通り行いました。

瀧尾神社佐々貴宮様のお申し出により、ご寄贈いただいた鱧屋形下部板彫刻が完成いたしました。

極彩色にて、霊獣を配した、素晴らしい彫刻が出来上がりました。



鱧屋形下部板彫刻が完成



2020
2021
榊巡行



鱧屋形漆塗り

令和4年(2022)

白木のままでありました、鱧屋形の塗りが、京都府仏具組合様のご協力により、蠟色(るいろ)塗、漆箔を施し、完成いたしました。



格天井天井画

上村淳之画伯作 格天井天井画

令和4年(2022)年7月21日、ご神体を安置する屋形の格天井を飾る「四季花鳥図」の一部が完成し、会所にてお披露目を行いました。描画頂いております上村敦之先生とのご縁は当保存会役員が「誰か扇面に画を描いて頂ける日本画家がいないか」と電話で相談した知人の隣に先生がいらっしゃったという奇跡的なものでありました。扇面描画を快諾頂き、画が完成した平成30年の祭事に大船鉦に先生をお招き致しました際に2度とこのようなチャンスは訪れないと意を決して「天井画が無いのは寂しい」とお話ししましたところ「大船鉦のお囃子の稽古を見て、ここには日本の文化が残っている。描きましょう。寄贈させていただきます。」と思ひも掛けな



い御返事を頂きました。全20枚のうち、鶴をはじめ「梅にウグイス」「桜にオシドリ」など格調高く描かれた10枚が完成し、残りは現在引き続き描画頂いております。同年

2022

3年ぶりの巡行



2023

11月、上村淳之先生が文化勲章を受章され、名実共に日本画壇の頂点に立たれました。四条町大船鉾保存会といたしましても大変喜ばしく、お祝い申し上げますと共に、当代一の花鳥天井画を子々孫々までの宝として大切に受け継いで参りたいと決意する次第でございます。上村先生との御神縁に感謝致します。

令和5年(2023)

令和3年度文化庁補正予算補助事業として進めておりました、屋形漆塗の残り部分新調と大金幣部分の修復が完成いたしました。屋形漆塗につきましては、京都府仏具組合様、大金幣につきましては石川漆工房様のご協力をいただきました。これで屋形にしまして、一部塗が未完成の部分もありましたが、約8割の漆塗を施すことが出来ました。

この年の巡行では、前年の艦屋形に続きまして、白木のままでありました屋形も大部分の塗が施された姿で、皆様にご披露することができました。

日越外交関係樹立50周年事業

令和5年(2023)、日本とベトナムが外交関係樹立50年を迎えることを記念し、同国の国営放送局であるVOVから、軒幕「しよすじうんりゅうもんししゅう縹子地雲龍文刺繍」をご寄贈い



軒幕「縹子地雲龍文刺繍」



屋形漆塗

大金幣部分の修復

いただきました。

縦53センチ、横190センチの計2枚で、ベトナム宮廷刺繍の技術を唯一継承する職人ブー・バン・ジョイ氏が制作を手がけられ、紅色の生地に龍や雲のデザイン、「寿」の字などを錦糸で描き出し、「栄華、権威、長命」などを表されています。

23日には関係者により寄贈式が執り行われ、制作から巡行までの模様は関西テレビ制作で、「日本×ベトナム絆の旅 祇園祭がつなぐ異文化交流」と題し、特番としてTV放映されました。



ご神体

大船鉾のご神体

大船鉾には主祭神である神功皇后がお乗りになっていらっしゃるんですが、前祭の船鉾と同様、安曇磯良神と住吉明神、鹿島明神の御三神がお供をされています。以下、四柱のご神体について紹介させていただきます。主祭神は神功皇后様です。水干に天冠を召しておられる立ち姿でお面をつけていらっしゃいます。皇后様の御神面は幕末の戦火の際にも命を懸けて守り抜かれ、現在に至っておりますが、皇后様の御本体と御三神は焼失いたしました。明治初めに皇后様のお体が復興されました。鉾が焼失した後も宵山期間中の居祭の際には町内でお飾りさせていただいていました。前祭の船鉾が出陣の船を象っているため、ご神体が鎧を着けておられるのに対し、大船鉾では鎧を脱いだ狩衣姿でいらっしゃいます。

安曇磯良神は鉾の先頭にお立ちになり、皇后様のほうを向いて合掌し、航海の安全を守っておられます。竜神ともいわれ、海の神様です。伝説によると、皇后様が三韓征伐に赴かれる際に住吉明神・鹿島明神とともに招かれましたが、長く水中に住んでいたため、フ

ジツボや貝殻で醜いお姿であったため、お供を遠慮されました。そこで住吉明神が磯良神を呼び出すために舞を舞われ、水中から姿を現されました。磯良神は、住吉明神の説得により皇后様の航海をお守りされたということです。磯良神は阿曇磯良丸と呼ばれることもあり、船舶に「丸」を付けるのはここからきているという説もあります。

前祭の船鉾の磯良神は手に干珠・満珠を持っておられます。これは水中に投じることによって潮の干満を調節し、無事に航海を続けられるようにするためのものです。大船鉾の磯良神はお帰りの姿なので珠は持たず、合掌されているお姿が以前の絵画に描かれています。文化11年の「増補祇園御霊会細記」にも「合掌のすがた赤熊をいただく、衣裳ハ花色地金入の半臂、うこん地精好の大口」と磯良神のお姿について記されています。

住吉明神は伊弉諾命の禊祓の際に海中から出現された神様です。祓の神様であるとともに海中にお住みになっていたことから航海の神様とされています。皇后様の渡海の際にも和魂は皇后様のそばでお守りされ、荒



神功皇后

安曇磯良神

住吉明神

鹿島明神

魂は行く先を導かれたと伝えられています。「増補祇園御霊会細記」には「弓、矢壺、白衣上に萌黄地狩衣、白精好の大口、衣折烏帽子を着す、太刀をはく」とあります。船鉾に倣い、白髪の老人の姿として復興いたしました。やはり船鉾と違って鎧は着けておられません。

鹿島明神は皇后様の後方を守護されておられます。日本建国・武道の神様であり、航海の神様でもあるとされています。古事記では武御雷神と呼ばれ、大国主命より国譲りを成し遂げられました。茨城県の鹿島神宮では「武甕槌神」と表記されています。奈良の春日大社は鹿島明神をお迎えして創始された神社です。「増補祇園御霊会細記」によると「立烏帽子を着し、右に長刀、左に唐団扇、衣装ハ白衣、上ハ茶地の狩衣、腰刀、白精好の大口、太刀をはく」とあり、鎧は召しておられません。住吉明神より若く、背丈も大きく精悍なお姿です。

ご神体の復興

主祭神の神功皇后様の御神面は蛤御門の変の際にも守られ、お体（御福形）も復興されましたが、お供の御三神は長年復興されないまま居祭を行ってきました。

そのため、復興を前にした唐櫃巡行では御神面を唐櫃に納めての巡行、鉾が復興されてからの三年間は皇后様だけの巡行でした。観衆は鉾本体や懸想品に目を奪われますが、御神体がいらっしゃらなければ船の形をした単なる屋台にすぎません。皇后様がいらっしゃるとはいえ、御三神のお供の姿があつてこそ大船鉾の復興を成し遂げたということがいえるでしょう。そのため、大船鉾保存会では、鉾の復興・充実とともに御三神の復興が急務であると考え、まずは先に御衣裳が復元されており安曇磯良神の復興に着手することにいたしました。

磯良神復興に先立ち、保存会有志で茨木市の磯良神社にお参りに行ってまいりました。宮司様にお話を伺っ

たところによると、小祠として祀られ、廃絶寸前であったものを復興されたため、古いものは伝わっていないということでした。現在は疣水神社(いぼみずじんじゃ)とも言われ、美容業界の崇敬を受けておられます。そのいわれは境内地にあります「玉の井」「便の水」とも呼ばれる井戸に発します。皇后様が三韓征伐の前にこの井戸で顔を洗われると醜い男のようになり、戦にふさわしい姿となられ、無事戦に勝利なさいました。帰国されて再びこの水で洗われると元の美しいお顔に戻られたということです。そのため、この水は疣を取り去り、美顔に靈験あらたかであるとされています。磯良神にまつわる彫像・画像などは伝わっていませんでしたが、大船鉾の御祭神である神功皇后様ゆかりの地であったことに不思議な縁を感じた次第です。

そして平成 29 年（2017 年）には安曇磯良神の本体を制作、お頭は龍頭の作者である森哲荘氏に依頼いたしました。塗りは川瀬猪山氏に依頼、赤い顔に金のお頭が鮮やかに仕上がりました。

次に住吉明神の復興に着手いたしました。まず代表者が住吉明神をお祀りする総本宮である住吉大社に参拝、住吉明神について宮司のお話を伺い、イメージを固めた上で彫刻を依頼、平成 30 年（2018 年）に白髪の長髪をいただくお姿をお迎えいたしました。

最後に残る鹿島明神については遠く茨城県の鹿島神宮に参拝し、宮司様から鹿島明神のお姿などさまざまな資料を拝見し、併せて香取神宮にもお参りさせていただきました。同じく森哲荘氏に彫刻を依頼、平成 31 年（2019 年）にお迎えし、これですべてのご神体が復興できたことは大きな喜びであります。

大船鉾の復興に際し、山鉾懸装品や金工、彫刻について審議する審議会に出席したところ、ある委員は、大船鉾全体を能舞台に見立てるべきであり、神功皇后以外の御神体も能面をつける姿にしてはどうか、と主張されました。しかし、前祭の船鉾の安曇磯良神・住吉明神・鹿島明神は丸彫に胡粉彩色の頭を戴いておら

れ、他の昇山の男性の祭神で面をつけておられる例がなく（浄妙山の浄妙坊は面をつけておられますが、重い一来法師の像を頭上に頂くために頑丈な自然木を本体に利用するための例外と考えられます）、町内でも丸彫の頭にすべきであるとの方針を確認しました。御三神の復興にあたっては出陣の船である前祭の船鉾の御三神のお姿から大きく外れることなく、ご神体としてふさわしい品位のあるお姿を目指しました。

御神体は祇園祭山鉾巡行において重要な要素であ



神功皇后



三神

り、そのお姿の復興に際しては歴史的考証に基づいて慎重に進めるべきではありますが、町内においては神様としてお祀りさせていただき、お越しいただく方に拝んでいただく存在です。美術的価値よりも信仰の対象であることが何よりも優先されるべきものです。保存会ではその精神に基づいて御三神の復興を進めてまいりました。山鉾連合会、京都府、京都市に対してもその旨を伝え、「鉾に乗せるものはすべて審議の対象である」という意見もありましたが、ご神体は審議の対象から除外することを確認いたしました。お衣装や鹿島明神のお顔の塗りなど、令和六年現在では一部未完成な部分がありますが、今後も完成に向けてさらに進めてまいります。

神功皇后の乗られる曳山について

祇園祭においては両船鉾と占出山に神功皇后様がお乗りになっておられます。他の祭礼においても神功皇后様は人気のある神様で多くの曳山・山車に乗っておられます。以下、いくつかの祭礼における皇后様についてご紹介したいと思います。

大津祭 神功皇后山

京都にも近く、祇園祭との関係も深いと言われている大津祭には神功皇后山があります。武内宿祢公を従え、「三韓之王者」という文字を岩に書かれる様子からくりで表されます。

筒井天王祭 神皇車（じんこうしゃ）

名古屋近辺で行われる「天王祭」は各地で祀られている牛頭天王社の祭礼です。牛頭天王は祇園社の祭神ですから祇園祭ということになります。もとは広井村で出されていたものを明治 20 年に譲り受けて使用しています。神功皇后様と武内宿祢が乗っておられ、その前で巫女人形が龍神の面をつけて舞うからくりが演じられます。

有松天王祭 神功皇后車

名古屋市南部の有松天満宮に祭礼には三基の山車が出されます。そのうちの一基、神功皇后車は明治6年に製作されたもので当初は関羽人形でしたが、日清戦争後に神功皇后様と武内宿祢に変更されました。

美濃祭り 舟山車（ふなやま）

名古屋の若宮祭りに出されていた1672年建造の黒船車を末広町が新造するにあたり、旧車を譲り受けたものです。神功皇后様の前で武内宿祢が舞うからくりが演じられます。人形は明治31年に作り替えられたということです。

秋の高山祭 金鳳台（きんぼうたい）

屋台上層正面に神功皇后様と武内宿祢がお乗りになっています。占出山同様、鮎釣り占いの姿です。最初の人形は文政年間の作。からくりはありません。

新湊放生津曳山祭 新町曳山 主祭神（王様という）として神功皇后様が武内宿祢とともに乗っておられます。1774年に曳山が新製されているので、江戸中期のものともみられます。

福野神明社例祭曳山曳山祭 上町・七津屋曳山

夜高祭りの翌日に行われる福野神明社例祭には四基の曳山があり、三基は高岡御車山と同様の曳山ですが、上町・七津屋の曳山の下回りは富山系の構造ながら、上層は船型であり、神功皇后様と武内宿祢が乗っておられます。曳山は文政期のものと考えられています。

潮来祇園祭 濱臺一丁目山車

佐原・潮来など、霞ヶ浦一帯に分布する「水郷型山車」は上層に伸縮式の大人形の乗る形式です。潮来の濱臺一丁目は神功皇后様が乗っておられます。明治20年製作のもの。

江差姥神神宮祭礼 神功山

山車は昭和40年に作られたものですが、神功皇后様は宝暦4年京都の松尾七郎兵衛が作ったもので江差では最古の人形です。おそらく日本最北端の皇后様でしょう。

そのほか、高崎や宇都宮、千葉県の鴨川など、関東各地で神功皇后様の山車がみられます。神功皇后様は東西を問わず、日本全国で崇敬され、親しまれている神さまであるということがわかります。関東の山車人形は一基につき一体のところが多いので、皇后様もおひとりで乗られています。一方、東海・北陸などは複数の人形が乗られるところが多く、神功皇后様も武内宿祢を従えておられる姿が見られます。しかし、船鉾・大船鉾のように御三神を伴う姿はほかでは見られませんが、その中で名古屋の神功皇后車だけは龍神（安曇磯良神）が巫女の舞という形で表されているのは興味深いところです。

石川県美川のおかえり祭や亀岡祭には神功皇后さまはおられませんが、武内宿祢が主役で（美川西新町は応神天皇を抱いておられます）出ておられるのもおもしろいです。

全国に船型の曳山は数多く存在しますが、神功皇后さまがお乗りになっている船型の山・鉾は祇園祭の両船鉾のほかは、知る限りでは上記の美濃祭の舟山車と福野の曳山だけです。全国に四基しかないと思われる皇后様のお船をぜひご覧ください。

なお、あまり知られていませんが、京都には神功皇后様が乗られる山がもう一つあります。それは伏見御香宮の伏見祭にかつて出されていた「占出山」で、名の通り鮎釣りをなさっている姿ですが、現在は出されていません。写真によれば山は昇山に四輪の御所車がついた形で囃子があったかどうかは不明です。山は解体されて所蔵会社に保存され、皇后様は祭礼の際に町内に祀られるということですが、ぜひ復活してほしいものです。

※「山車」という名称はふさわしくないという考えがありますが、地元でそのように呼ばれている場合はそのまま使っています。

囃子方

わたしたちが大船鉾を復興させるに至る過程には、平成9年（1997）に囃子を復興させたことが大きな原動力となったことは、みなさんよくご存知のことと思います。岩戸山保存会のご厚意により、その囃子方様方のご指導を受けて始めた大船鉾の囃子でしたが、数年経ったある年、岩戸山の師匠から「ウチが教えるのはここまで、これからは自分たちの手で新しい曲を作りなさい」と仰っていただき、大船鉾囃子方自らが曲作りに挑戦することになりました。ただ新曲を作るとしても所謂「祇園囃子」から逸脱したものになってはいけません。能管を使用しているからといって、能・狂言のお囃子にしてしまってもいけないのです。わたしたち大船鉾囃子方の中には長年にわたり祇園囃子をしてきたという経験者はほとんどおらず、祇園囃子に関してほぼ素人ばかりでした。したがって曲を作るにしても祇園囃子そのものの勉強がとても大切で、まず他の鉾のお囃子から学ばなければなりません。その中からわかったことは、祇園囃子には二つの大きな特徴があることです。一つは繋ぎの曲があって、曲と曲を切れ目なしに変えていけること（他の祭り囃子では一つ一つの曲が独立していて、曲を変えるときはいったん前の曲を終了して次の曲に入るというパターンが多い）。もう一つは同じ旋律で鉦や太鼓の打ち方が違う複数の曲があるということです。このような祇園囃子と同じような特徴を持つお囃子は祇園囃子系と呼ばれる大津や伊賀上野など限られているようです（京都市立芸大田井竜一先生による）。したがって新曲を作るにあたっては、この祇園囃子の特徴を踏まえた上で作曲することになります。そうしていくつかの曲を作ってレパートリーを増やしていきました。

その頃の私たち大船鉾の囃子は、池坊学園のステージや京都友禅ビルで披露するステージ囃子でした。ところが京都駅前ヨドバシカメラの一角に文化遺産展示室を設けるという話から、俄に大船鉾の復興が現実のものとなってきました。そしてついに2012年から唐

櫃巡行、2014年からの鉾での巡行が決まりました。さあそうするとそれまでのステージ囃子というわけにはいかなくなります。本来祇園囃子は巡行のお囃子です。巡行の囃子にするためにはどの場所・場面でどう囃子をするかが求められます。

祇園囃子は大きく分けると「渡り」と総称される奉納のお囃子と、「戻り」のお囃子があります。ご指導下さった岩戸山囃子方の師匠から戴いた曲は、奉納の曲2曲と戻りの曲（つなぎの曲を含む）11曲、そして日和神楽の計14曲でした。巡行するとなるとそれではまだまだ足りないことから、奉納の曲2曲と戻りの曲6曲（つなぎの曲を含む）を作り、平成24年（2012年）合同巡行の殿（しんがり）を唐櫃巡行を以て臨みました。

曲を作るにあたっては、最初に考えたのが所謂「神楽」のお囃子が必要であるということ。そしてそこにつなぐ曲、「神楽」から次につなぐ曲が必要だということです。また戻りの曲に関しては最初に教えていただいた曲だけでも巡行は可能でしたが、もう少しバリエーションが欲しいので増やすことにしました。ただ戻りの囃子に関して言えば、どこの辻回しでどの曲を用いるか、河原町通りではどういった曲が中心になるのか、御池通では、新町通ではなどなど、先に申しましたように場所と曲の関係を整理していく必要があります。巡行経験のない大船鉾囃子方にとってはまさに未知の世界でした。そして、さらに大きな問題は後祭りの復活。大船鉾が鉾で巡行復帰するタイミングで後祭り巡行の復活が決まったのです。大船鉾は後祭りの殿を務める鉾ですから、後祭り巡行が復活となるとそれまで合同巡行で行われていた左回り巡行での演奏パターンとはまったく異なるものとなります。（実は私自身、以前から後祭り巡行のお囃子には関心があり、北と南の観音山でベテランの囃子方にお聞きしたことがあるのですが、微妙にニュアンスが違っていました。また祇園囃子を研究しておられる京都市立

芸大の田井竜一先生にも、ぜひ後祭りのお囃子について調査をしてください、とお願いしていたのですがなせ半世紀前のことなので残念ながら解明することは出来ませんでした)

後祭り巡行を考えると町内出発は「打ち込み」から「渡り」なのは当然だと思いますが、そのまま御池通まで「渡り」で行き、「渡り」で辻回しを行うこととなります。鬮渡しは、かつては三条高倉で行われていたとありますが、京都市役所前で行うこととなりましたからそこまでは「渡り」。鬮渡し場を通過後戻り囃子にして御池河原町で辻回し、河原町を南行して河原町四条。この河原町四条で奉納の「神楽」を演奏し「唐子」で辻回しをする。そのためには河原町通りを南下して四条の手前で戻り囃子から「神楽」繋ぐ曲が必要。そして四条河原町での辻回しのあと、もういちど戻り

囃子に戻さなければなりません。なかなかの難作業でしたが、幸いにもお囃子を教えていただいた岩戸山に戻り囃子のテンポから「神楽」のテンポに繋ぐ「七つの湯立て」という曲があったので、それを参考にさせていただいて戻り囃子から「神楽」へ繋ぐ曲を作ることが出来ました。そして「唐子」から戻り囃子に繋ぐ曲を新しく作り、なんとか後祭り巡行のお囃子とすることができました。鉦での巡行復帰後10年が経ち、この間何曲か加えて現在は以下の通りの曲構成で巡行を行っています。それでも他の鉦に比べて技量も曲もまだまだ足りません。したがって今後も囃子方一同精進して、大船鉦の囃子をより良い物にしていかなければならないと思っています。



囃子譜面



囃子題目



大船鉦巡行の囃子

奉納の曲	「渡り」「桐（渡りを上げる曲）」「泊（渡りを休む曲）」「神楽（河原町四条で奉納）」「唐子（河原町四条での辻回し時）」「翁（戻りの神楽・・・御旅所の前の奉納曲）」
戻り囃子	「地囃子」「鏡」「岩戸」「若葉」「波」「華」「麒麟」「巴」「ひふみ」「流し」
辻回し時の曲	「睦月」「千鳥」「於久」
繋ぎの曲	「三（入りの三・出の三）」「四」「五」「七」「凱船（唐子から翁に入る曲）」
囃子を止める曲	「一度の休み」「凱歌の一遍」「凱歌の三遍（終曲）」「日和神楽」

※大船鉦では御池通の御所八幡前で「渡り」を上げて戻り囃子にし、その後もういちど「渡り」に戻しています。これは嘗て鬮渡しがこの場所の南に在る三条高倉の長谷川松寿堂で行われていたことに因んでいます。

大船鉦の祇園囃子を復活させたのは

公益財団法人四条町大船鉦保存会 理事 佐々木 定寿

子供の頃から四条町の祇園祭は居祭りでした。祇園祭後祭の山鉦の最後尾を巡行していた大船鉦は、1864年（元治元年）の大火によって焼失してしまったため、焼失を免れた一部の懸装品（鳳凰の刺繍がある鱸屋形欄縁下水引幕・龍の刺繍がある天水引幕・前掛幕・後掛幕・龍と波の刺繍がある舵・大金幣）を北山にある京都府立総合資料館（現在の歴史館）から日本通運の美術運送車で運んで来て、輪番制で町内会長宅の表の間に展示するものでした。

宵山期間中は、厄除けちまきと、ご洗米の授与、ご洗米は紙を小さく折りその中に少量入れて、大きな三宝に山を作るように載せ、お参りに来られた方に菜箸でお渡ししていました。四条町のある新町通の両側には、夜店がずらりと並び大勢の方で賑わっていました。

しかし、1995年（平成7年）に、これまで続けてきた居祭りが町内住人の高齢化と世帯数減少のため中止になりました。

何もしない、何もない祇園祭を初めて経験し、なんともいえない寂しさを感じました。大船鉦の鉦本体は復興しないと以前から言われておりましたので、それなら囃子を復活してみようと思い立ちました。囃子方に集まってきた人達で、再び居祭りができるのではないかと思ったのです。

翌年には岩戸山の囃子方の方にご指導していただき、練習場所のある池坊学園で毎週、鉦・笛・太鼓の稽古を始めました。本来なら小学校の低

学年から始めるものを、大人になってから始めたので、それは簡単なことではありませんでした。

曲目は、地囃子・つなぎの曲・鏡・岩戸・終りの曲を、繰り返し練習しつづけました。翌年の宵山に囃子を披露することになっていたもので、池坊学園での稽古以外にも、数名集まってほぼ毎日練習していました。その頃四条町は、絶えずどこからか、囃子が聞こえていました。

1997年（平成9年）の宵山に囃子を披露し、約130年ぶりに大船鉦囃子の復活が実現できました。囃子を始めた時は、ただ居祭りを再びやりたいという思いだったのですが、2014年（平成26年）に大船鉦の鉦本体も復興。鉦に乗って囃子ができるようになるのは夢のようで、十数名で始めた囃子方は27年経った今、約50名の大きな組織となりました。沢山のご縁や、皆様の熱意に感謝するとともに、毎日囃子の練習をした日々を懐かしく思います。



衣装

天水引 ～金地雲龍文紋織～



天水引とは屋根の柱まわりを飾る織物で、最も高い位置に掛けられる事からこの名でよばれます。

作りは紋織で金糸・絹糸を用い、画面横方向に経糸をはしらせ、小ぶりの緯糸で文様を織り出しています。これは着物の帯などと同じ製法になります。そのため鉾に掛けたときの強度はやや弱いものの、織りこみが堅牢なため200年以上経た今もあまり傷みが目立ちません。また、なべて他の鉾も同じですが唯一裏地が人目に触れることから、裏地裂も凝らしてあります。

次に絵柄ですが、金糸を地色として用い、大胆に龍を天駆けさせてあります。双方の龍とも下から見られることを意識してか、腹を多めに見せています。そして紅蓮の焰をほとぼしらせませす。左舷の龍は右手に如意宝珠（或いは法螺）のようなものを持っています。ここで面白いのは単なる玉や火焰玉でないことで、大船鉾中で数少ない仏教色を感じる衣裳です。（神仏習合の時代なので不可思議ではありません）目線はかっとなを睨み、口を控えめながら阿形に保ち、左手と左足で力いっぱい気蓋の上を權でゆきます。右舷の龍は見返りで、何も手にしません。ただ、現状のまま右舷に掛けますと顔の向きこそ進行方向へ向きますが、体の向きはバックします。そこでひとつの仮説として、この幕の焼け具合が左舷に比べてマシなことなどと総合して、もともと裏側を表に使っているのではないかと個人的には想像します。前後の雲は基本的に同柄をめぐして色を変えています。また紋織の特徴を活かし、左右面の頭部以外は同じ型を使った可能性が考えられ

ます。

尚、この天水引は経年の傷みが散見されるため、平成26年本巡行前に第二装を新調しました。こちらは表面が金地桔梗連花文、裏は淡翡翠地に鉄線連花文です。鉄線花は放っておいてもよく茂り、たくさんの花を咲かせることから子孫繁栄に通じ、願いを込めました。宵山時に掛けております。

下水引一番 ～緋羅紗地波濤飛魚文肉入刺繍～



蓋し大船鉾町が所蔵する幕類衣裳の中で最も人目を引くであろう、件の下水引は文化年間の調進になります。本品は緋羅紗の大幅裂地に本金糸にて下面から六分にわたって波濤をあしらい、上面を飛魚が闊達に跳ねています。

まず羅紗について、時は室町末期1546年頃、南蛮人（ポルトガル人）が種子島に漂着したとき、鉄砲とともにもたらされたのが「ラーシャ」という彼らの外套でした。過酷な航海をする彼らの外套は厚手で、耐久性を要したため1枚物の布で拵えてありました。色はコチニールという、虫をつぶして得る染料、若しくはケルメス（動物性染料）で染められ、それはもう目の覚めるような真っ赤、桃山文化の黎明期に「色覚」の化学反応を起こしたことは間違いありません。小早川秀秋が関ヶ原合戦で所用した「猩猩緋羅紗違い鎌文陣羽織」などは日本で用いられた羅紗の濫觴と言えるでしょう。その後も羅紗の豪華な魅力は華を求め人々に好まれ、輸入され続けました。下水引1番に用いられている羅紗ももちろん舶来品、と言いますか国産品は明治後期以後しか存在しません。

次に波濤です。金糸を駒縫い（金駒）技法にて波濤を象っています。この刺繍部分は昭和初期に大胆な修理が施されており、文化年間のオリジナル部分と明治改修部分がはっきりしています。オリジナル部分は金の純度が低くおそらく銀が混ざっているせいで、今や鈍色となっています。また経年劣化なのかオリジンなのか不明ですが、台紙の和紙がところどころ見えています。明治改修では、留め糸が取れてしまい「うどん」状になった箇所を補作したようです。こちらは金の純度が高く新造時の輝きを今も保っているものと思われます。また、全体像として興味深いのは舳先の波が大きく、舳へゆくほどに飛沫が多く細かい波に変化してゆく様子です。これは大きな船が海原をきり進む際、舳先で大きく海を割り、やがて飛沫に変わるさまをよく表しています。

最後は飛魚です。終始飛魚と申していますが、現品はどうみても「飛龍」です。四条町ではこの幕を納める箱の墨書より「飛魚」と呼ぶようにしています。神功皇后の三韓征伐時、帥船のまわりを海中の大魚悉く浮いて道案内をした云々と記紀にあり、それがための取材と思われます。ただ、この場合「凱旋の船」というイデオロギーは如何に！？ という疑問は残りますが…。それはさておきこの飛魚、正面に1体、左舷11体、右舷11体と合わせて23体が躍動します。これをしばらく眺めているとふいにぱしゃぱしゃと叩水音が聞こえてきて、邯鄲の枕よろしくやがて自身も居ながらにして水面に遊ぶかのような錯覚に陥る見事さです。こちらも連綿と修理が施されており、おそらく明治頃～昭和中期にかけて実にさまざまな人の手が入っていると思われます。修理を施すというのは町内大宝への愛着の念に間違いのないのですが、残念ながら構図的なことに無知な人の修理あともみうけられ、原型をとどめていないもの、飛魚（飛龍）としてつじつまの合わないもの…（例えば羽際の炎が体を燃やしてしまっている等）が半数近く占めています。しかし、糸色と金糸

を撚り合わせ架空のめでたい生き物に相応しい鱗やギヤマン細工の目玉など往時の迫力は失われておりません。また部分々に綿をいれ和紙で押し肉盛を表現してあります。この盛り加減も実に繊細優美で王朝好みの京都周辺でしか見られない逸品なるかと思えます。

下水引二番 ～金地彩雲草花文綴織～



この幕は「緋羅紗地飛魚文（下水引1番）」の平行下に掛けられる2番目の水引です。金糸を地色としていますが、現品から5歩離れ、感覚の目で鑑賞すると茶地或いは金茶地に見えます。これは時代色のせいでしょう。かような金地に連綿と雲文様を配し、これを奇貨として草花をバランスよく置いたデザインにしています。

作りについては綴織です。が、ただの綴織ではない事の特筆して申し上げねばなりません。それはこの幕の創作時に「ただならぬ意気込み」で作られた事を審らかにするからです。日く、織りの方向について、長大な幅に対して緯糸を使い、20cmほどの短い丈に対して経糸を用いていることです。これは、例えば帯を織るにあたり、長尺方向に経糸を配し、短い緯糸を幾重にも織ってゆくことが自然ですが、現幕はそのアンチテーゼをゆきます。理由は明確に2つあり、①吊る方向に経糸が流れる現幕は非常に強い＝鉾の幕として長持ちする、②船型の船体にあわせて幕をめぐる際、曲線部分に雲柄をあわせる＝滑らかかつ裁断なしで現幕を作れる…からです。そこに見る製作者たちの「ただならぬ意気込み」とは、その長大な幅を織る織機を

あつらえる事から始めたことです。当町に於いて復興を発起する現町人のあいだでは、今なお近くに、確実にその息吹を感じる先達の意気込みを嘗めて踏襲することを確認し合いました。

尚、この下水引二番は舳先部分が欠落しています。舷側部分では下水引一番の裏地（麻）裂に縫い付けて、一番二番をセットにしてあるのですが、前の一番のみ独立して存在します。舳先部分の現幕は散逸したか？と思われるかもしれませんが、所有保存しております。ソーダガラスの額に入れた状態で、裏地を張らず一枚裂として保存されており、毎年のお飾りに飾っております。この舳先の2番で興味深いのは、かつて裏であった部分が退色せず、新造時の原色を今に伝えてくれているところです。（綴織なので裏と表は対象になるだけで、色・柄・文様は同じです）色鮮やかなこの水引の原色を見ると、後述します「虚ろな悲哀」が増しますので、是非一度ご覧いただきたい思います。

この幕をぼんやり見つめること1分余り…、ふと気づくとこの世の虚実混沌を忘れ、やがて「胡蝶の夢」の境地へいざなわれる…鑑賞者をそんな心持にしてくれる奇妙な連彩雲柄です。その色はもう、泣きたくなるほどの悲しいブルー。誰もがもつ心中の虚空を「潤んだ悲」の感で満たします。プラトンは、「肉体は魂の牢獄」だと説き、崇高なる精神の完了形・イデアの完全世界への旅路を是としました。後にプラトニックと仮称されるこの無感覚な精神状態こそ、この幕のメッセージと相通じるのではないかと見ています。人が食物に含まれた元素を食し、その元素が肉体に取り付き、その瞬間に古い肉体構成元素が排泄されるという循環（流動し定まらない肉体）を目の当たりにしたとき、人たるものの「私」を形成するのは「ただ不確かな記憶のみ」という絶望にひしがれ、魂は瞳孔を開いたまま茫漠の荒野に丸出しとなります。それを認識した瞬間、「私」を形成するアイデンティティがいかに

儚いかを痛感するからです。その精神の苦痛から脱しようともがいた人は、「無感覚」の擬人ベアトリーチェに導かれパラダイムへ到達したダンテよろしく、或いはカニバリズムの、或いは「完全承認」の擬似快樂を経て、やがて無感覚へと至る。中世の東アジア人たちも、同じく滅ぶ肉体と永遠輪廻の魂を信じました。人類が連続模様を生み出すのは輪廻と永遠への憧れからです。古代エジプト人もユダヤ教者も秦始皇も、プロセスの違いはあれ、永遠回帰を是としました。現幕の連続文様が「雲」であるとき、それは存在の有無の掴み難い気象体ゆえ、よりいっそう、霞のような「永遠」を追う人々の「悲壮感」、を連想させます。ひとの心の不充足感（朽ちる肉体・叶わぬ願い）の恐怖を埋めるため、「せめて魂よ永遠なれ」と祈る姿がこの幕から見て取れます。

「嗚呼…惜しい哉、君」そんな感傷にひたりつつ、巡行の朝、曙光あびてキラキラと儂く輝く現幕の麗しさを愛おしむ限りでございます。

艦掛 ～緋羅紗地鳳凰肉入刺繍～



やや小ぶりながら、艦屋形下部に掛ける懸装で、緋羅紗に精緻な鳳凰を刺繍し、大船鉾の背面を彩る重要な幕です。鳳凰は天子隆盛の兆しとして現れ、桐にとまり竹の実を食べるとされています。それがため、この種の幕は桐竹地に鳳凰という豪華な図柄が散見され

ますが、そこは耽美派の大船鉾、地上より4mほどの位置に掛かりひらひらと揺れる幕であることから桐竹を配さず、ひゅうと飛翔する様に意匠しています。

鳳凰の縫いは肉体のパーツごとに分割されており、胴や頭など肉入り部分は和紙に綿詰めを施してあとから縫い付け、それに付随して手足や尾などを駒縫いにて仕上げています。

一方、羅紗は鳳凰の刺繍時期（文化年間）よりも古く、尚の調考を要します。しかしこれはめづらしいことではありません。当時、羅紗は国内で生産しているものでないため、調達となると商人（三井など時の総合商社）に諮り、入手しました。三井ほどの商家でしたら手持ちもあったでしょうが、南蛮での生産時期がずっと前のものを在庫していることが普通です。半年前に南蛮で生まれた羅紗を、すぐ舶来させ、直ちに売りさばくほうが不自然です。

最後に特筆すべきはその緋色の濃厚さです。「随分黒っぽい赤」という色で、大船鉾の懸装類中、もっとも深く濃い赤を間近で堪能して頂きたい思います。

大旗 ～緋羅紗地神紋切付刺繍～

縦176cm・横89cmのこの大旗は舞台後部より竹竿にて吊り掛けるもので、軍船の軍旗にあたります。

古来絵図と町内目録にあります。現存しておりませんが、平成25年吉井英雄様のご寄進により、(株)木村商店にて新調致しました。

白羅紗を緋染料にて二度染め、重厚感を出しました。神紋は直径70cm、一人の縫師の作業としては言語に絶する大きさですが、



無事完成を見ました。神紋パーツは手裁、ひとつひとつ大きさがミリ単位で異なりますが、それが為、いにしへの味が感じられる幕として完成いたしました。

旗の上部には白色太細の2本線が引いてあります。これは古来より軍旗その他の旗に見られ、陰陽（日月）を顕します。陰陽相まって世世形成す…これ至順なれば将旗に写さん…因って我が軍勢は至順なり～…ということでしょうか。

はたほこ 幢 ～絹地顔料置吹流し～



絹か。麻か。綿か。

古絵図より、大船鉾の舞台後部東側に三色の吹流しが見て取れる…。東より赤・黄・白…。

しかしながら平成25年の四条町には伝わっておらず、そは新調と定めしたのは同年夏頃の仕儀でした。

吉井英雄様より実に適時なる寄進申し出これあり、恐悦至極…！とお礼もそこそこに、すわ新調！と急ぎ(株)木村商店にて製作にかかりましてございます。

今の世に於いて、「軍船の吹流し」というものが汎用品であるはずもなく…検討考察考慮推測すること半年、「絹で顔料置き！」にて試作…。いや、素材は消去法で、「麻」は民の衣であり1抜け、綿は我が国で三河木綿が産業ののってから本格的に使われたのでは？と2抜け…を経て「絹」採用のはこびだったかと…。

この「絹で顔料置き」が想像だにせぬ成功だと知るのとはそれから三月後…。南風を呼び、満を持して新町通りで吹流しを吹き流す！ さても見事に吹き流れる

ことこの上なし！！
一同大喜び。
という顛末でありました。

胴幕 ～緋と萌黄羅紗段だら継～



緋と萌黄色に染めた羅紗を継ぎ、大船鉾の船体胴をぐるりと覆う懸装です。

元治大火をかいめぐり四条町に伝わりますが、現存品はやや裁断（船形の下部をまっすぐに切り長方形に整えてある）された状態です。これは長らく続けた居祭りに際し、町内家屋で展示するものの、その形・大きさから用にあまること散々…なゆえの仕儀でしょう。

この現存品は四条町所蔵品の内でもそうとう古く、萌黄羅紗は江戸初期の南蛮舶来品であります。緋羅紗も時代不明ながら、経年著しいことは見て取れます。

この時代物を大切に伝えるべく、平成26年の巡行に際しては復元新調品を用うことにしました。

色…、色は一…どうしましょうか？ 江戸初期なら所司代は板倉勝重ですか。彼が見た色のままが再現できると嬉しいです。我々も、我々の先祖が肉眼で見た色を是非とも共有したい！

復元新調では、色の調整に手間暇を惜しまぬ事とし、継ぎ目の焼けの少ない場所から色の「精」を見出しました。その「精」を外さずちよっぴり濃くして完成したそれは、平成の大船鉾にとっても似合うもので、苦惱一変、歓喜の次第です。

もう一手、仕上げのカギは裾のライン取りです。ずんぐりしたシルエットを好まぬゆえ、艦へゆくラインを上へ、上へとあげ絞りました。斜め前からでも、真横からでも、後ろ斜めからでも、とくにご覧いただきたい逸品です。

裾幕 ～生成地変わり青海波文～



裾幕は懸装類中、最下に掛かる幕で、大船鉾の船形外観を構成する重要なパーツです。元治大火以降これを所有していませんため新調の必要がありました。そこで今回、京都市立芸大の学生に図案を依頼、複数案戴き大船鉾保存会で選議・選定させていただく形で調進いたしました。平成25年8月1日、図案十作を保存会に懸案いただきました。この試みは、昨今世上でよく見かけるような、「大人が学生にサービス精神でもって活動・創作の場を与え、話題作りを図る」というような軽いものでは一切ありません。何しろ、今や価値がつかないほどの江戸中後期の見事な幕で鉾の周囲をぐるりと覆うものの一翼を飾る裾幕です。次代の京都芸術壇を担うであろう若者に、早い（若い）段階で、百年・二百年と大切に扱われ、七月の晴れ場で連年本装として掛け、やがて日本の文化財になる鉾の懸装幕を拵えていただく…＝本物の創作を！という念のもと依頼させていただきました。出来上がったそれは幕のテーゼをしっかりと踏まえて戴き、哲学ある図案をと頼み込んだ情念が通じたのか、お世辞なく、十作どれも捨てがたいものを提案いただきました。どれも捨てがたくよいものばかりでしたので「泣いて馬謖

を斬る」思いで選定し「とても学生が作ったとは思えぬほど地に足のついた、老獪ささえ漂う見事な本装用裾幕」が完成いたしました。

制作に於いては、原案を戴いた六氏の手により、生成り地木綿に手描き染料にて、大小の青海波を散りばめ息吹を生み出しました。あまりの出来栄えにはっと息をのんでその場に立ち尽くし、他日この時の想いを裏面に銘文として添えさせて戴きました。筆舌に尽くし難き慶び、これあり！ です。

世蓋(せいがい)は 闊(ひろしき)ゆゑ 睹(み)ること能(あた)わずと

言い候えども

此の幕は 数(すう) 奇(き)にして 之(これ)を顕(あら)わす

町中 裘(きゅう)孤(こ)白(はく)を得(う)るに 々(おなじ)

蛭(むし)雪(ゆき)の功(こう)なる京(きょう)都市(とし)立(た)芸(げい)術(じゆつ)大(だい)学(がく)生(せい)

東(とう)穂(ほ) 愛(あい)子(こ) 佐(さ)藤(とう) 花(はな)音(ね) 三(さん)富(とみ) 翔(しょう)太(た)

覺(かく)野(の) 真(ま)規(き)子(こ) 木(き)塚(づか) 奈(な)津(つ)子(こ) 花(はな)岡(おか) ゆう

六(む)氏(し)に 格(かく)段(だ)の礼(れい)を 申(ま)し上(あ)げ候(こう)

平成廿六年六月

四条町

跳勾欄幕 ～紫羅紗地木瓜巴紋切付刺繍～



この往時の幕は元治の大火で散逸し、四条町には現存していませんでした。ただ絵図と町内目録にて、この幕がはっきり載っていますことから、平成の復興に際し新調致しました。

平成25年に中野敬様・小倉孝様より寄進のお申し

出があり、榊木村商店に制作を依頼、往時を凌ぐ名品ができたと自負しております。

制作に際し、絵図より判読して5つある紋を3つに減じました。これは5つ紋に並べた場合、各紋が下水引一番の飛魚とほぼ同じ大きさになってしまい、美観を損なうと判断したからであります。加えて間隔をあけすぎず並べることで力強さを出しました。

紋の切付に際し、意図して各々のパーツ（木瓜の花びらなど）を手作業で形つくり縫い止めてあります。このことで36℃くらい…ちょうど人肌の温度が感じられる幕にできたと喜んでおります。また、木瓜紋と巴紋とでは、同サイズで拵えた場合、巴紋のほうが視錯覚にて大きく見えることを考慮し、実寸ではこれをやや小さくしています。

羅紗は白羅紗より紫染料の二度染にて重厚感を出しました。今後200年ほど、滅多と退色はせぬものと慮っております。

艦掛角房と艦掛角房金具

～惣黒揚巻飾付艦掛角房と金五七桐紋艦掛角房金具～



大船鉾の艦部には艦掛（緋羅紗地鳳凰文肉入刺繍）が掛かります。この幕の角部を飾る房と、房掛け金具はどの資料、絵図にも見ることができます。しかし、平成の四条町に伝来していません為、平成24年に新調いたしました。

まず角房は、松村成昭様のご寄進により、製作させて頂きました。大船鉾を飾る殆どの房が鉄焙染にて黒染めしたものであることを踏襲し、惣黒にて仕上げました。組裂は京組16組にて製作です。現在では、一般に組裂は32組を使用するものですが、文化時代の慣いにより、古技法にて苦

労のうえ仕上がりました。

角房金具は上記の房を掛け吊るす金具です。柳本昭様の寄進により、金具全体を神功皇后ゆかりの五七桐にあわせ、やや小ぶりながら、角房とのマッチング能く、大船鉾背部を飾る重要な装飾として長く使わせていただきます。

鉦房掛金具 ～金黒色双び踊り桐文鉦房掛金具～



鉦房掛金具とは、囃子に於いて鉦方の用う鉦を吊るす金具です。大船鉾右舷の軒桁内側に8丁打ち付けています。

元治大火で屋根を焼失しておりますので、併せて新調の要がありました。平成24年に寄進を募りましたところ、中島克敏様・小澤誉子様より寄進の申し出を頂き、恐悦至極、感謝無尽の心で新調させて頂きました。

銅板彫金にて2種の桐を躍動させ、総枠を神功皇后ゆかりの菱形に造形、金を施し、さらに一部を擦り取り技法にて黒部分を創出しました。

屋形内陣で燦然と煌くそれは、皇后様の威徳に相応しい出来栄であること、仕上がりをみて一同嬉々としてしばらくの時間、見上げ浸りました事を付け加えます。

軒幕 べにしゅうすじょうりゅうもんししゅう 紅縹子地雲龍文刺繍

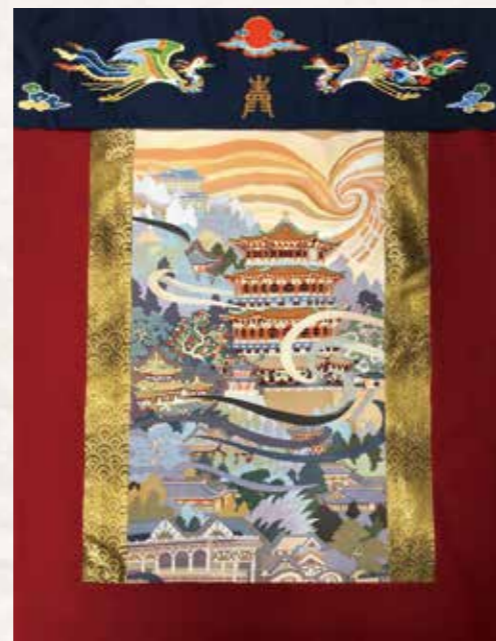


縹子とは身近なものでいうサテン織物です。縦緯いづれか一方を表に出すことで表面がなめらかな生地に

なります。日越（ベトナム）国交樹立50周年の記念としてご寄贈いただきました。

秦代より交趾（ベトナム北部）進出の記録があり、ながく中華勢力圏の南限域だったベトナムは文明産業にもその色を強く残します。本幕はベトナムの宮廷衣装をつくる名人ブ・バン・ゾイ師の手による龍の刺繍です。前部軒かどにかけ、正面は真向き・舷面は2頭の龍が向き合うはざまに「寿」字を配しためでたいものです。

後掛 きょっこうまんじゆさんずつたりこんじにちりんほうおうもんししゅうのみずびき 旭光萬壽山図綴織付紺地日輪鳳凰文刺繍水引



木村商店を通じ大船鉾は「山鹿精華」作、「旭光萬壽山図綴織」を手に入れました。山鹿精華とは昭和の名工で、図案起こしから実織までこなし、特有の図案と世人を寄せ付けない精緻な織技術で名を馳せました。数々の作が「山鹿の手織錦」として今に残ります。祇園祭の懸装にも、函谷鉾水引「群鶏図手織錦」、菊水鉾旧水引「鳳凰青鸞図」、白楽天山見送「北京萬壽山図手織錦」、船鉾前掛「鶴と雲龍図」北観音山二番水引「群鳥図」と同三番水引「宝相華瑞花」など多岐に見え、昭和の新調事業にその気韻を残しました。上

記に加わる大船鉾後掛は、造営時の萬壽山楼閣を東より優しい朝日が覆い、その細かく反射した細光の群れが下界の隅を照らします。あたかも、御霊会を終えた洛中（大船鉾の通った後の清浄な世界）を示唆しているようで、本番が楽しみです。

この幕は後掛けに仕立てるにやや細長く、後ろ姿の間が奇妙になるため水引を付しています。紺の絹地に色糸を用い、中央に「日輪」、伸びやかに光輝を放ち向き合う「鳳」と「凰」、めでたきを愛でる「壽」の文字を配した立派なものができました。鳳凰は、希代の聖君が現れる前兆として尊ばれ、人が見たくてもなかなか見られないもの故に、見えた時は瞳孔が開き、眩さでその象をとらえきれなかった事でしょう。この世を構成する陰陽に五行（木火土金水）それぞれの象徴色を配し、「陰陽五行、順に従うて四方正と成る」「士人、順に従うて聖君正を得る」「その兆しや良し、鳳凰の羽下しるを」。御霊会の最後に瑞兆を告げてくれる事でしょう。

ともまんまく 艦幔幕



復興時に小松舞夢氏よりご寄贈いただきました、艦上部を巻く紺地幔幕です。当初無地でしたが令和3年より白抜き神紋をほどこしました（同氏寄贈）。木瓜・巴の配置を検討し、面あたり同じ紋をならべるのがきれい結論に達し、左右面を木瓜紋・後ろ正面を巴にしています。

かじさお 梶竿



元治大火を免れた大船鉾の大楫には「梶竿」がありませんでした。元からなかったか、はたまた焼失したか…。前祭の船鉾には朱塗りの梶竿があります。大船鉾の古絵図に梶竿があります。しかし、楫を救って竿だけ残すか？という疑問や文献資料に見当たらない等の事実があり、その真相は長く謎でした。

そんな折の平成30年、楫本体の調査を行い重大な発見がありました。楫の飾り幕の内部、楫裏面にアリ型のホゾ痕跡をみつけたのです。さらに角部の金具が不自然なことからはずしてみるとそこには見事に続き柄の波刺繍があり、金具は後付けだろうと推測しました。以て令和元年、梶竿を新たに誂えました。

そんな折の平成30年、楫本体の調査を行い重大な発見がありました。楫の飾り幕の内部、楫裏面にアリ型のホゾ痕跡をみつけたのです。さらに角部の金具が不自然なことからはずしてみるとそこには見事に続き柄の波刺繍があり、金具は後付けだろうと推測しました。以て令和元年、梶竿を新たに誂えました。

大金幣



令和5年復元新調

鱧幕板飾り木彫彩色



こさいうん つがいちょうりゅう
五彩雲に番鳥龍（後正面）



しろなみ さい
白波に犀（右舷）



しろなみ かいば
白波に海馬（左舷）

瀧尾神社の寄進により新調なった飾り彫刻です。瀧尾社本殿拝所の瑞獣を摸刻、古絵図を参考に彩色し往時を再現致しました。後正面の鳥龍は頭が鶏、体に鱗、獅子尾を持ち、鳥形四足の稀有な靈獣です。天皇即位に用いる「獸形帽額図」にその名がみえます。この、御代替わりを見守る靈獣に「疫厄退散なって世が代わる」意を重ね、五彩雲を出だす寿もよせて「春秋万歳」を表します。また、左舷の海馬は「疫厄祓除の吉報を馳せて伝える神馬」であり、右舷の犀には「静謐な世を犀く守成する」願いを込めています。

鉦車（車輪）令和6年新調



旧は昭和28年より菊水鉦車輪として使われたものを平成26年、大船鉦に譲渡いただき令和5年まで使用してきました。ざっと70回、曳初め、巡行使用のほか復興に際した練習などでも活躍しました。とくに旧御池通りの道路材だった耐熱コンクリートが硬くて消耗はげしく傷んだようです。また連年のすり減りによって径が小さくなり、真円もくずれイビツになっていました。この先は修理しても及ばないと判断、状態よく後世に渡すことも考え新調を検討するようになります。

とはいえ1輪500万円～という高いカベをみあげ一同うなっていたところ、誠都運輸倉庫(株)秋山洋一郎氏より2輪寄贈の申し出をいただき、以て新調事業に踏み出しました。以後2年におよびさらなる篤志を募り、令和6年、径7尺0寸4分(2134mm)輪幅6寸(181mm)という人類史上最大の鉦車を完成させることができました。輻に刻んだ「大船鉦」銘は当保存会森田正和氏の揮毫。改元に「令和」額を揮毫された書家の手になります。

主な新調・復元一覧（2011年から2024年まで）

※敬称略

元号	西暦	名称	寄進もしくは補助事業	制作者	設計	監修
平成23年	2011	船体木組み部分	社団法人京都青年会議所	竹田工務店	末川 協	大船鉦復元検討委員会
		神功皇后 狩衣	平成23年度京都府の未来を担う人づくり推進事業	渡文株式会社		林 駒夫
		安曇磯良 厚板装束	平成23年度京都府の未来を担う人づくり推進事業	渡文株式会社		林 駒夫
平成24年	2012	石持・車輪・車軸	菊水鉦保存会			
平成25年	2013	屋形部分 (屋形・鱧屋形・跳ね出し高欄)	京都ライオンズクラブ	竹田工務店	末川 協	大船鉦復元検討委員会
		欄縁	黒主山保存会	石川漆工房		
		力綱	三若神興会 祇神会	京房紐(有)のがき		
平成26年	2014	裾幕	京都市立芸術大学	京都市芸術大学		吉田雅子
平成27年	2015	前掛（紅地雲龍青海文綴織）	祇園祭懸装品新調事業	株式会社龍村美術織物		藤井健三
		天水引房飾 大4丁 小4丁	「平成の正倉院」づくり事業	株式会社鍵辨組房店		藤井健三
		安曇磯良 うこん地精好大口袴	「平成の正倉院」づくり事業	株式会社のむら		
		格天井	京都紫明ライオンズクラブ	前河平八 堀金箔粉株式会社	末川 協	
平成28年	2016	龍頭	瀧尾神社	森彫刻所		水野耕嗣 小嵩善通
		前部下水引一番	京都未来の匠「技の継承」事業	株式会社龍村美術織物		藤井健三
		車軸	前軸 京都ライオンズクラブ 後軸 森本稔	竹田工務店	末川 協	
平成29年	2017	跳ね高欄朱塗り	京都未来の匠「技の継承」事業	京都漆器工芸協同組合		平井俊行
		後掛（旭光萬壽山図綴織）	大船鉦自主事業	山鹿精華		
		安曇磯良神勸請	大船鉦自主事業	森 哲荘・川瀬猪山		
平成30年	2018	住吉明神勸請	大船鉦自主事業	森 哲荘・川瀬猪山		
令和元年	2019	鹿島明神勸請	大船鉦自主事業	森 哲荘		
		神功皇后 写し面	大船鉦自主事業	見市泰男		
		一二番水引6枚及び鱧水引3枚 (~9年間)	祇園祭山鉦懸装品新調事業	株式会社龍村美術織物		
令和2年	2020	龍頭漆箔	京都ライオンズクラブ	京都府仏具協同組合		平井俊行
令和3年	2021	鱧屋形下部彫刻（3枚）	瀧尾神社	早野鋳・下田修寛 松村年恒・中島誠作		小嵩善通
令和4年	2022	鱧屋形漆塗り	京都未来の匠「技の継承」事業	京都府仏具協同組合		平井俊行
		格天井天井画	上村淳史			
令和5年	2023	屋形漆塗残り部分	令和3年度文化庁補正予算補助事業	京都府仏具協同組合		平井俊行
		大金幣復元	令和3年度文化庁補正予算補助事業	石川漆工房		平井俊行
		軒幕（縹子地雲龍文刺繍）	ベトナム国営放送（VOV）	ブー・バン・ジョイ		
令和6年	2024	車輪	誠都運輸倉庫株式会社・ご篤者の方々	有限会社八野大工		平井俊行

車輪新調

京都青年会議所さんから木組み寄贈のお話を頂き、心沸く大船鉾衆のもとへ舞い込むもう一つの吉報。菊水鉾さんが車輪を譲ってくださるんやてありがたいなあ。

以来10年、大切に使用させていただきました。昭和28年製のこの車輪は、巡行ごとに新たな傷が刻まれます。その傷を都度々、私に見せてきてこう訴えます。「まだ鉾を支えるチカラはあるけれどいつ何時アレなるかもしれんから後継は探しといてよ」酒焼け中年オヤジのようなかすれた声で語りかけてきます。「わかりました大丈夫です、後継カシ材を探し集めますので今しばらく辛抱を」

平成29年(2015)最初のカシ材を発見、購入します。宮崎県の船舶材商を皮切りに、綾部の新材商からも原木入手。さらに京都市内の材木商から兵庫県北部産の巨木を買付けました。いずれも樹齢250~300年のしろものです。

さて、これどっかに置いとかなあかん。とりあえず円山公園の倉庫にいれとくか。人力だけでは無理ちゃう？「大丈夫です、見た目はごっついけど言うても木ですから、10人もいたらいけるでしょう。コロ(小丸太)にのせて綱でひっぱりつつ、追い艇子でニジニジ遣りましょう」

当日…張りきって集まった十数名の男たちは1時後、松ぼっくりのようにうずくまり動かなくなります。重すぎる…これは無理や。兆しは作業初頭からありました。積んできたユニックでおろす際、トラックが傾き倒れかけていたのです。それを見た男たちは言葉少なになり遠い目をします。心中はみな同様、これはヤバい…。だが落ち込んでいても仕方ありません。「大丈夫大丈夫、また別の方策を考えます」今日はどうしようもないのでその場に放置する許可をとり出直すことに。

数日後、車方棟梁さんの知り合いが庭に置き場所を提供してくれるという吉報あり、必勝策で誠都運輸さ

んに輸送依頼。善意のかたまり、京北の中島さん家に冬の小雨のなか搬入。吠えない番犬があたたかく迎えてくれます。レンタルしたレッカー車がぬかるみにはまる軽いアクシデントはあったものの、安置できました。

安堵する男たちに次なる試練が告げられます。「虫を出すため皮を剥きます。軽作業です大丈夫です」

日を改め皮むきに集まる男たち。運搬などで懲りたかアタマ数が減っています。「まあ大丈夫でしょう」。方々ノミや金槌を携えて意気揚々カシに向き合います。これがどうして、まったく剥けません。いくらやっても漆がきの初辺のような浅い傷がつくのみ。見かねた家主の中島さんが、これぐらいでいかなあかんのちゃう？と持ってきてくれたのはチップパー。道路をはつったりする強力な工具…というか重機です。どうしてこれがよく剥けます。ただ数分たらず手がしびれますので交代しながら少しずつ。

のどかな山村で材を乾かすこと5年あまり。つぎはより内部を乾かすため板状に製材していきます。上記収集材とは別に、手伝い方棟梁さんが入手くださったカシ材があり、こちらは岐阜で水中乾燥していました。この材を岐阜の製材屋さんに集めて製材。ここで肌(良し悪し)をはじめてみる男たち。おおむね良材であることを確認して「大丈夫」。ほどなく京北



保管の材たちも製材して車輪製作をお願いする飛騨高山の(有)八野大工さんへ搬入。もう3年ほど倉庫で自然乾燥いただき、令和6年の春より刻み開始しています。

直径7尺(2,122mm)輪厚み6寸(182mm)コシキ厚2尺3寸(615mm)どれも山鉾史上最大の「大丈夫なたま」となります。輪のつなぎ目は雄⇄雌と順につながりますが、江戸期の玉は1箇所だけが雄⇄雄、対になる1箇所を雌⇄雌とすることで、最後の大羽嵌めを容易にしています。これに倣い現代では見られなくなった上記古色を復活させました。同じく古味を楽しもうと、今年だけ表面塗装せず、生なりで巡行い



たします。コシキ材は八野さんで入手いただいた樹齢100年ものケヤキ。生育が早く80年ぐらゐの木でコシキ径(642mm)がとれるようです。樽釘座板は木瓜紋をかたどったおしゃれなもの。かかる重さを分散しながら動くようにわざと軋ませる設計になっています。

平生応援してくださる友の会の皆様、たま新調のご寄付いただきました皆様、誠都運輸倉庫(株)さまに特段の御礼申し上げます。

※造作の都合あり、最終仕上がり径は7尺0寸4分(2,134mm)となりました。



巡行衣装と巡行同行者の役割

大船鉦では巡行復帰に際し、巡行衣装を揃えました。衣装作製にあたりまずは祇園祭山鉦巡行に相応しい品である事、また、鉦を中心とした巡行行列の全体の配色バランスを考える事を重要視いたしました。

ここでは巡行衣装と巡行に関わる人々の役割をご説明いたします。

セクションごとに衣装が別れており、その役割をご存じ頂きますことで巡行を更に違った視線でお楽しみ頂けるのではと思います。

お供



白麻紋付き帷子に袴を着用し一文字傘を携行。武士の正装ですが、一部町人にも認められその場合一番シンプルな鮫小紋柄であった事から、藍の鮫柄に致しました。離れるとグレーに見えます。

お供は保存会役員、四条町内会員、支援関係団体役員など二十数名で構成され、巡行責任者を先頭に鉦の綱先で主に隊列を組み、数人が鉦の後方で検分として随伴します。主な役割は御旅所での参拝神事を行う事、鉦運行の指示、囃子方への指示、鬮渡し場での口上、ちまき献上等を行います。総じて鉦の所有者として、「四条町の祭礼行列」を取り仕切ります。

人形方

湊鼠色（青味を帯びたグレー）小千谷石摺麻紋付帷子を着用。御神体に触れる事が出来るのは神事係と人形方のみであるため、不測の事態に備え鉦上で数名が御神体の側に控えます。

囃子方



囃子方は綿製の注染浴衣を着用します。現在は白紺地を基本に数年に一回柄が変わります。帯は西陣製正絹角帯、八坂神社の御神紋と大船鉦の別称である凱旋船鉦の凱の字が織り込まれております。囃子方は文字通り鉦上で囃子を行います。跳ね高欄右舷に鉦方、左舷に笛方が位置します。囃子には渡り囃子と戻り囃子があり、渡り囃子に始まり神楽、唐子を奉納し戻り囃子で町内に戻ります。約40人の囃子方が鉦に乗り込みます。



大工方



棟梁は白練色小千谷石摺麻紋付帷子を着用し、鉦の後を歩き脱落部品などないかを検分します。また鉦上の大工方に指示を与えます。他の大工方は鉦上に3人、路上に数人、生成麻四の字背紋の半纏をまとい主に鉦の屋形部分、大金幣や旗などの懸装品の保護に当たります。また、鉦建に際し屋形部分を組み立てます。

の懸装品の保護に当たります。また、鉦建に際し屋形部分を組み立てます。



手伝い方



棟梁は青朽葉色麻帷子を着用し、巡行における鉦本体を統括します。綱内に入り扇子を振り鉦上に居る音頭取りへの指揮を行います。他の手伝い方は綿浴衣姿の音頭取り6名、棟梁と同じ青朽葉色の綿四の字染め抜き背紋の半纏数名が帯同する。綱を扱うのも役割で、辻回しの際は綱がずれぬよう押さえる役割も。なお音頭取り衣装は、京都市立芸術大学学生に私共の意向を反映したデザインを考えて頂き、作製いたしました。

鉦建てに際して手伝い方は鉦の船体部分を組み、大船鉦伝統技法の縄がらみを行います。

車方



棟梁以下十数名は同じ縹色の綿四の字染め抜き背紋の半纏を纏う。役割は鉦の舵取りであります。新町通などの幅の狭い路では電線と鉦が接触しないように、



棟梁が指示を与え、車輪中外にいる車方が鐺デコを車輪に掛けて方向を微調整します。辻回りで竹を敷き詰め方向転換させるのも彼らの腕の見せ所です。追いデコを使い銚の動き出しに力を掛けたり、掛矢を使い銚を止めたりする役割でもあります。

曳き手



曳き手頭は縹色の麻帷子を着用し主に綱先で曳き手に指示を与えます。曳き手は生成綿四の字背紋の半纏を着用し陣傘を被ります。文字通り銚を曳く役割です。大船銚の場合、



曳き手は46名が基本で、京都青年会議所関係者が中心となって構成されています。

警固



祇園祭に見物人が大勢押し寄せるのは今に始まったことでなく、その昔も銚運行の安全のため周辺を警固する役目の人々がありました。いまの大船銚ではこれら警固を5~6

人で組織し、沿道整理をはじめ曳き手さんへの給水指示のほか、処々の伝令など巡行の細部を支えます。

授与品

お守り



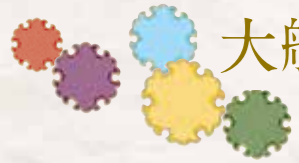
絵はがき



手ぬぐい







大船鉦巡行復帰 10年の歩みと今後の展望

公益財団法人四条町大船鉦保存会 理事長 木村 宣介

感激の巡行復帰より10年の歳月が経ちました。大船鉦は目標とする往時の姿に向かい年々順調に進化致しております。

これも偏に皆様方の温かいご支援・ご協力があったとの事と心より感謝申し上げます。

「巡行復帰が真のスタート」まさにその言葉通りに、この10年間、当会の実行委員会であります「大船鉦の復興を考える会」を「大船鉦の振興を考える会」と改名し、祭事執行、復興、維持保存に関わる事業を年中休む事無く全力で取り組んで参りました。

巡行復帰の翌年には京都市の観光誘致イベントにて六本木に鉦を建ないかというお誘いを頂きました。本祭りを一ヶ月前に控えた6月に無謀とも思える強行日程でしたが六本木ヒルズアリーナにて鉦建てを行い、お囃子を行いました。役員、囃子方、手伝方、車方、運搬担当も含め遠方での合宿にて一気に組織としての絆が深まりました。また、その様子は首都圏だけに止まらず全国ニュースで取り上げられ、一ヶ月後の本祭には沢山の方がお越し下さり、思いがけず復帰2年目にして「大船鉦」の知名度を上げる事ができました。

同年には町内に会所を取得し、祭事の拠点を築くことが出来ました。保存会の会計役員を長年務めて頂いた田中久男氏が転居される事となり、大船鉦の為にと格安価格にて譲渡の話を受け、役員借入と京都信用金庫様にご融資頂き購入致しました。改修費用につきましては京町家再生研究会様にご指導を受け、ワールドモニュメントファンド様、京都市より助成金を頂き京町家作事組の匠の技を以て立派な会所が出来上がりました。会所の完成により、鉦本体部材の大方を町内に収蔵できる事となり、猛暑・疲労の中での円山公園収蔵庫への運搬作業が軽くなり助かりました。会所完成により復興事業開始から5年間部材を復興展示頂いていた京都駅前ヨドバシビルの京都市文化遺産展示室から撤収することとなりました。この展示室への模擬鉦展示の話が無ければ全てが始まりませんでした。ヨドバシカメラ藤澤昭和様には心より感謝申し上げます。

2年目の巡行を終え、今後の復興事業で最優先すべきは御神体三体の復原勧請であるとわかりました。当初は復原検討委員会で現存する神功皇后1躰の御神体での巡行が認められ、復原されていない残りの御神体、安曇野磯良神、住吉大明神、鹿嶋大明神については神代としてそれぞれ御冠、御刀、御長刀を用意して鉦に乗せておりましたが、やはりその空虚感は否めませんでした。それは見た目だけでなく、神事である巡行を経験し存在そのものが必要であると皆々が感じたのでした。当時の松居米三理事長の号令の元、安曇野磯良神、住吉大明神、鹿嶋大明神の順に3年で勧請を果たしました。御神体勧請につきましては文化財事業の性質上、各方面からご指摘、ご指導がありましたが、最終的には四条町の御祭神

である事を御配慮頂き町中の納得のいく形での勧請をさせて頂きました。

鉦の部材、装飾品も10年で進化、充実して参りました。現在進めております復興事業第2期（鉦の完成を目指して）にも多くの篤志家の皆様から多分なるご支援を頂いております。その浄財を原資に京都府、京都市の補助金制度を利用し、装飾品の制作・部材の装飾などを行っております。装飾品では現在約200年の年月を経て傷みの激しい一二番水引の復元新調を6枚6年の事業で行っております。今年度が最終年度ですので6枚揃う来年の巡行でのお披露目となります。その後も鱧刺繍幕3枚3年事業まで決定しております。また、これも損傷の激しい天水引も近年中に新調しなければなりません。

屋形・鱧屋形漆箔事業におきましては復興事業当初に屋形を御寄贈頂きました京都ライオンズクラブ様より跳ね高欄・鱧屋形朱塗り・龍頭の漆箔事業にご支援を頂きました。京都紫明ライオンズクラブ様からは漆箔を施した格天井の部材を御寄贈頂きました。屋形・鱧屋形漆箔事業は京都府染織工芸課伝統工芸若手育成事業助成金を利用させて頂き、京漆器組合、京都府仏具組合に施工をお願いし、1年1年こつこつと進めておりましたが、昨年、文化庁より臨時助成があり施工が進んだことにより、大部分が来年で完成する運びとなりました。

瀧尾神社様からは龍頭と鱧高欄幕板飾り彫刻を御寄贈頂きました。瀧尾神社佐々貴宮司様は同社舞殿天井に掛けられた龍の彫物が大船鉦の触先を飾った龍頭と兄弟龍ではないかとお声掛け下さりました。文献など決定的な証拠を見つけることは出来ませんでした。調査で、瀧尾神社と大船鉦の龍頭に当時の下村大丸が関係する立場にあった事が明らかになり、また、大船鉦の絵画資料の龍頭が瀧尾神社のものと酷似している事や瀧尾神社の龍頭が鉦に取り付けるのに相応しい構造になっている事などがわかり、兄弟龍を作りましょうと御寄贈をお申し出下さいました。鱧高欄軒板幕飾り彫刻も文献や絵画資料より海馬と書かれていることから、瀧尾神社の拝殿を飾る海馬、犀と後の調査で解った鳥龍の彫刻を大船鉦にも採用したいと申し出ましたところ、快諾を頂いただけでなく、御寄贈頂く事となりました。

日本画家上村淳之画伯に四季花鳥図を格天井に描画頂きました。復興事業が始まる十数年前から鉦の部材に画を描いて頂くなら上村画伯をお願いしたいと思っておりましたが、画伯とのご縁は突然訪れました。扇子の画を描いて頂く日本画家を探し当会の役員が知り合いだった京都女子大学名誉教授出井豊二先生に相談の電話をしたところ、横に上村画伯がいらっしゃいました。その電話で無理を承知で扇子への描画をお願いして頂いたところ、「わかった」と即答いただきました。

扇子画には大金幣と龍頭を描いて頂きました。その年の宵山に画伯をお誘いし、鉦を案内させて頂いた際に二度とこのようなチャンスは訪れないと思い、「天井が寂しいのです。」と勇気を振り絞り声を出しました。画伯は全てをお察し下さったようで「わかった。描こう。寄贈するよ。」と仰って下さいました。「本当ですか？」と呆然とする私に「此处には日本の文化が残っているから。」とお声掛け下さり、会所から鉦を見つめておられた画伯の横顔を一生忘れることはありません。不思議なご縁でしたが、後に画伯から「出会うべくして出会った」と仰って頂きました。余談ではございますが、画伯のご自宅の裏側が神功皇后陵だったのには驚きました。

昨年はベトナム国営放送様から軒下刺繍幕を御寄贈頂きました。ベトナムと日本の国交50周年記念に交流を深める何かが出来ないかとベトナム国営放送がお探しになっていると関西テレビ様からご紹介頂き、軒下を飾る刺繍幕を作って頂けないかをお願い致しました。現在も宮廷衣装に施されるベトナム刺繍は精緻なものであり、祇園祭にも伝わる中国刺繍の龍袍に使われる刺繍が伝わったものであり同じものでありました。宵山期間中に行いました贈呈式は外務省案件となり、全権大使の姫野様ご夫妻にご臨席賜り、盛大に執り行いました。

本年は車輪四輪を新調致します。巡行復帰に際し菊花鉦様より譲り受けた昭和27年製の車輪を大事に使って参りましたが、経年の損傷により修理の時期が来ておりました。昭和41年以降に復活した大船鉦は国の有形文化財ではありませんので、高額部材に適用できる補助金はありません。一昨年誠都運輸倉庫株式会社様から車輪二輪の御寄贈の申し出を受け、また、復興事業開始時より希少な椋材を集め保管乾燥して参りました材木が部材として使える状態になった事により、残り二車輪分の寄付を募りましたところ、全国の篤志家の皆様より御寄付を頂く事ができ、この度の新調が叶いました。文献に残る祇園祭山鉦最大の車輪は直径6尺8寸(205cm)でしたので、それを更新すべく新調する物は直径7尺0寸4分(213.4cm)と致しました。この車輪の大きさ変更は逆に国の有形文化財ではない事により出来得る技であります。

以上全ては紹介できませんでしたがこの10年一つ一つの事業の積み重ねで大船鉦は大きく進化致しました。しかしながら幕末の往時の姿に戻すことを目標に行っております復興事業は未だ道半ばであります。漆箔事業が一段落する来年以降は彫刻・飾金具等による本格的な装飾を施すこととなります。その為の彫刻・鋳金具の装飾意匠の方向性を確認する第1回の検討会を山鉦連合会、京都府、京都市、専門委員の先生方にお集まり頂き開催致しました。長刀鉦が先頭に行く鉦に相応しい意匠の装飾をしているのなら、大船鉦は殿に行く鉦に相応しい装飾をしなければなりません。文献や絵画資料も大切ですが、町衆の思いや願いを如何に鉦の装飾として表現をするかが民俗文化財を継承・復原する上で最も大切な事であると考えております。

私共の復興事業はその時代そこに生きる者が出来得る精一杯の情熱を持って継続して行わなければ成就しません。世代が変わったとしても方向性さえ解っておれば何れそれは成就

すると断言できます。先人から引き受け次世代に継ぐのは形ある物や型式だけではなく、祇園祭山鉦町の誇りと情熱であると実感しております。

令和元年、大船鉦復興事業の最大の功労者松居米三初代理事長が身罷られました。大船鉦の復興は松居氏が居なければなかったと言っても過言ではありません。振り返れば松居氏の枕元に神功皇后がお立ちになり「頼みましたよ。」と仰ったあの日から本気の復興事業が始まりました。「四条町大船鉦神事祭事を守るには鉦の復興しかない。」と松居氏と共に歩んだ年月は一生忘れる事はありません。若気の至りで何事にも突進型だった私に道の進み方を教えて下さいました。足下にも及びませんが、何よりも神事と人を大切にされ、周りが笑顔で溢れた松居イズムを継承して参りたいと考えております。

復興事業当初は誰か一人が抜けると神事祭事が滞る組織でありましたが、10年の年月により誰が抜けても例年通りに粛々と神事祭事が催行できる組織になることが出来ました。

残念ながら四条町衆の高齢化、人口減少は続いており、町衆役員の祭事での活躍は限定されつつあります。しかしながらその反面で町外役員の当事者意識が向上してきたのは組織として大変喜ばしい事です。また、若手囃子方より囃子だけではなく祭事を手伝いたいという者も出て参り、修行いたしております。将来、就職で祭事から離れなければならない事があっても、戻ってきた時、即戦力になる為には経験が必要です。一昨年、復興当初より祭事を下支え頂いている方々を中心とした「神和会」が保存会内組織として発足いたしました。大船鉦では「清祓いの儀」以外の神事を男性のみで行いますが、祇園祭祭事には女性の下支えが不可欠です。祭事中に女性が活躍できる場所で遠慮無く動いて頂きたいという思いから「神和会」が生まれました。

今後も現在のように四条町衆が中心となって神事祭事を続けて参る所存ですが、大切な事は町衆であることより、情熱を持った神事祭事に精通した者が祭を行う事にあります。

私共では「鉦屋」と呼んでおります。一人でも多くの「鉦屋」を輩出して参りたいと考えております。

今日までの大船鉦復興事業を一言で表わしますと「御神縁」です。復興の軌跡はまさに奇跡の連続でした。結果論かもしれませんが、進むべき道はどんなに困難でも開かれ、進むべきで無い道はどんなに良い話でもとことん閉ざされました。まるで、大神様に正しい道に導かれるかのようでした。その道の中で出会うべくして出会った方々との輪が大きくなって今日の大船鉦があります。今後この「御神縁」という輪を更に大きく確固たるものになるように努力して参ります。私共はこの十年同様、今後も全力で復興事業に取り組めます。ご期待下さい。

最後に改めまして、ご支援・ご協力・ご指導を賜っております、八坂神社様、文化庁様、京都府様、京都市様、京都ライオンズクラブ様、京都紫明ライオンズクラブ様、京都青年会議所様、瀧尾神社様、都草様、平安女学院様、池坊学園様、祇園祭山鉦連合会様、各山鉦町の皆様、友の会の皆様、提灯会員の皆様、篤志家の皆様に衷心より御礼申し上げます。

宵山の風景



会所飾り



駒形提灯



童歌



屋台提灯